板付周辺遺跡調査報告書

(10)

—1984年度調査概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第115集

1985

福岡市教育委員会

正誤表

市報告　第１１５集

頁	行	誤	正
例言	２５	SE...井戸.SK...土壙	SE...井戸.SF...道路.SK...土壙
	２７	磁針	磁北
挿図目次	Fig. 5	北から	東から
〃	8	（１：２００）	（１：１００）
〃	５３	SK４８	SK３０
〃	６８	北方向	南から
1	１５	既して	慨して
3	表１０	土壙（１３－１４）	土壙（１３－１４C）
	5	削滅している	消滅している
4	Fig. 4	2cm	4cm
〃	１７	瓜形文	爪形文
6	Fig. 8		（上図）南から （下図）北から
		（１：２００）	（１：１００）
〃	表左３	碧王製	碧玉製
１０	Fig. １４	（下段左から３）R５９９	R５５９
	表左行	５８４。背面。鍬	５８４。背面。鋤
１４	Fig. １９	（遺物番号）	（左）（右上右）（右上左）（右下）
１５	Fig. ２１	SD０１出土木製品　１	SD０１出土木製品　１（１：２，１：３）
１７	３３	その段段	その段階
１９	表左上		SK１２
〃	表左	R１００３　１００４	R１１０３　１１０４
２４	Fig. ４３	R３５　R３６	R３６　R３５（入替え）
２５	表	３８　（砲か…	３８　（砲か…
２６	Fig. ４７	R３８	R８０
〃	表	R３０	R８０
２８	Fig. ５３	SK１８出土遺物	SK３０出土遺物
〃	3	遺物を出土た。	出土した。
３１	7	消滅している。	消滅している。
３２	Fig. ６７	２０m	５０m
３３	6	工事I期	工事工期
３４	3	第６次調査	第８次調査
〃	１２	遺桓保存は	遺構保存は
３６	Fig. ７３	２　第５トレンチ（北から	２　第５トレンチ（南から）
３７		井戸祭紀に	井戸祭祀に
〃	8	舟塗り，	丹塗り
３８	9	条理期の	条里期の

NO.1289

巻首図版　SD26全景（北から）

序

板付地区は、わが国で最初に稲作文化を受け入れました。国の史跡、板付遺跡がその事を顕著に表現しています。板付遺跡は、福岡市民が全国に誇り得る遺跡の一つです。

今年度の報告書の内容は、農耕文化の発祥の地、板付遺跡の範囲に含まれる資料と、板付遺跡に歴史的基盤を置きながら、発展した古代のお寺、高畑廃寺の領域を示す資料が含まれています。

今回の調査報告書は地元の土地所有者である、中牟田保氏、勝山保氏、小西利三氏の御理解と御協力の結果であり、深く感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の御理解を得、かつ学校教育、社会教育に充分御活用頂く事ができれば幸いと思います。

昭和60年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

例　言

1　本書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和59年度に実施した福岡市博多区板付遺跡、ならびに周辺遺跡の調査概要である。なお、上記遺跡で行なった他の3区の調査についても概要を併せて掲げておく。

2　発掘調査は、教育委員会文化課が実施した。調査組織は、以下のとおりである。

総括　文化課長　生田征生
埋蔵文化財第2係長　折尾　学
調査担当　柳沢一男
杉山富雄
庶務担当　松延好文

3　本書の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ……杉山
Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ　……柳沢

4　本書に掲載した実測図の作成は各担当者の他に藤尾慎一郎氏、鈴木克彦氏、野村俊之氏、宮井善朗氏の、写真撮影には上方高弘氏の協力を戴いた。記して感謝申し上げる。

6　掲載遺物実測図のうち、土器断面白ヌキは弥生土器・土師器を、スミベタは須恵器を、アミは陶磁器をそれぞれしめす。

7　調査に際して用いた遺構表示記号は次のとおりである。

ＳＢ…住居址、ＳＤ…溝、ＳＥ…井戸、ＳＫ…土壙、ＳＸ…前記以外の遺構

8　本書に使用する方位は磁針である。真北との偏差は西偏6°40′である。

9　本書の編集は、杉山・柳沢の協議により行なった。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　B11a区調査の概要 …… 3

Ⅲ　G7d区調査の概要 …… 20

Ⅳ　F7f区調査の概要 …… 22

Ⅴ　E7a区調査の概要 …… 31

Ⅵ　F5d区調査の概要 …… 32

Ⅶ　高畑遺跡第11次調査の概要 …… 34

Ⅷ　おわりに …… 38

挿 図 目 次

Fig. 1　板付及周辺遺跡調査区(1：7500) …… 2

2　B11a区全景(南から) …… 3

3　先土器時代の遺物(1：1) …… 4

4　縄文時代の遺物(1：2) …… 4

5　SX30(北から) …… 4

6　弥生時代の遺物(1：4、1：2) …… 5

7　SD26B全景(東から) …… 5

8　SD26遺物出土状況立面図(1：200) …… 6

9　甕出土状況 …… 6

10　SD26出土遺物 …… 6

11　SD26出土木製品　1 …… 7

12　SD26出土木製品　2 …… 8

13　SD26出土木製品　3 …… 9

14　SD26出土木製品　4 …… 10

15　SD01C全景(東から) …… 11

16　SD01土層図(1：60) …… 11

17　SD01A平面図(1:200) …… 12

18　SD01出土遺物(1：4) …… 13

19　SD01出土遺物(1：2) …… 14

20　墨書 …… 14

21　SD01出土木製品　1 …… 15

22　曲物出土状況(東から) …… 16

23　斎串出土状況(北から) …… 16

24　SD01出土木製品　2 …… 16

25　SD14・SD15(北から) …… 17

26　SD14出土遺物 …… 17

27　SK20(南から) …… 17

28　SD25(南から) …… 17

29　SD25出土遺物(1：4) …… 18

Fig. 30 ＳＤ25（北から）…… 18
31 ＳＫ28（東から）…… 18
32 ＳＫ28出土遺物（１：４）…… 18
33 ＳＫ12・ＳＫ13（北から）…… 18
34 ＳＫ12・ＳＫ13出土遺物（１：４）…… 19
35 軒瓦（１：５）…… 19
36 調査区全景（東から）…… 20
37 調査区全体図（１：200）…… 21
38 調査区全景（北から）…… 21
39 Ｆ７ｆ区全景（西から）…… 22
40 調査区周辺図（１：1000）…… 22
41 調査区全体図（１：100）…… 23
42 ＳＫ２（北から）…… 24
43 ＳＫ２出土遺物（１：４）…… 24
44 ＳＫ４（東から）…… 24
45 ＳＫ６（東から）…… 25
46 ＳＫ６出土遺物１（１：４）…… 25
47 ＳＫ６出土遺物２（１：４）…… 26
48 ＳＫ７（西から）…… 26
49 ＳＫ12（南から）…… 26
50 ＳＫ13・ＳＫ78（西から）…… 27
51 ＳＫ13出土遺物（１：４）…… 27
52 ＳＫ30（東から）…… 27
53 ＳＫ48出土遺物（１：４）…… 28
54 ＳＫ48出土遺物（１：４）…… 28
55 ＳＫ48（東から）…… 28
56 ＳＢ47（北から）…… 28
57 ＳＢ47出土遺物（１：４）…… 28
58 ＳＸ１出土遺物（１：４）…… 29
59 ＳＢ50（南から）…… 29
60 ＳＢ50出土遺物（１：４）…… 29
61 ＳＫ３（東から）…… 30
62 ＳＥ５（南から）…… 30
63 ＳＥ14（南から）…… 30
64 層位模式図…… 31
65 Ⅲ区全景（北から）…… 31
66 古代末水田とその整地層（東から）…… 31
67 Ｆ５ｄ区周辺図（１：1000）…… 32
68 Ⅰ区　水田（中段）北方向…… 33
69 Ⅳ区12層　遺物出土状況（北から）…… 33
70 ＳＫ９（Ⅲ区部分）北から…… 33
71 第７トレンチ全景（東から）…… 34
72 トレンチ位置図…… 35
73 トレンチ並びに遺構…… 36
74 ＳＥ30出土土器実測図（１：５）…… 37
75 ＳＥ30実測図（１：40）…… 37
76 板付周辺遺跡概観（１：10000）…… 38

Ⅰ　はじめに

板付遺跡及び周辺遺跡においては、1973年度から、国庫補助事業として埋蔵文化財の発掘調査を行なっている。1984年度に行なった埋蔵文化財の発掘調査は、下水道工事に先立つものも合わせて計６件を数える。

本年度の調査は大きくみて、３つの地域において行なっている。

1984年度 板付周辺遺跡調査区

調査区	所在地	調査対象面積(調査面積)	調査期間	備考
板付Ｂ11ａ	博多区板付6丁目	1838㎡（1560㎡）	84.5．5～7．14	高畑遺跡第10次調査
Ｇ７ｄ	〃　板付5丁目1-14	468㎡（ 370㎡）	84.7.24～8．6	
Ｆ７ｆ	〃　板付5丁目3-17	640㎡（ 225㎡）	84.8．9～9．17	
Ｅ７ａ	〃　板付5丁目	長 80ｍ（ 80㎡）	84.9.14～9．27	麦野下水道
Ｅ５ｄ	〃　板付2丁目	長 165ｍ（ 126㎡）	84.10.27～85．1．31	〃
高畑　11次	〃　板付6丁目1-1	長 550ｍ（ 550㎡）	84.12.10～85．1．25	九州管区警察学校内下水道

板付遺跡環溝の載る中央台地の東辺、東南辺部では、下水道の建設に先立って行なったＥ７ａ区、Ｆ５ｄ区の調査は、いわば道路に設けたトレンチの調査であったが台地縁辺部の状況を知ることができた。Ｅ７ａ区では沖積地が従来考えていた以上に湾入し、それの弥生時代前期からの利用を知った。Ｆ５ｄ区では、水田は台地から遠い北端部のみに遺存していた他に、Ｅ５・６区、Ｅ５ａ区、Ｅ５ｂ区でみられたような整地層が、調査区南端部の台地裾部から以北の一段低い沖積層・ローム層の面に厚く堆積していた。Ｆ７ｆ区では台地周縁部の斜面に立地する弥生時代の遺構の遺存する区域の調査を行ない、貯蔵穴、住居の分布を確認した。

板付南台地の西側沖積地では、Ｇ７ｄ区の調査を行ない、南に接するＧ８ａ区検出の溝及び水田の広がりを検出確認した。

板付台地の南に位置する台地に立地する高畑遺跡では、警察学校地内の下水道工事に先立った、高畑遺跡第11次調査で、台地東部の状況が明らかになってきた。既して台地縁辺部では遺構の遺存状態は良好で、弥生時代前期当初からの居住が確認できた。Ｂ11ａ区（高畑遺跡第10次調査区）は台地東北端に接する位置にあり、Ｂ12ｂ区・Ｂ12ｃ区で検出された溝が北から東へ流れの向きを変えること、これに平行して走り、台地縁辺に沿って北西方向に走る溝のあること、Ｄ10ａ区、Ｄ10ｂ区で検出された古墳時代の溝が、本調査区まで延びて来ているらしいことがわかった。この溝からは、その２つの調査区と同様の状態で多数の木製品及び高坏・小形丸底壺を中心とする多数の土師器の出土があった。

以上、継続して行なって来た地点毎の調査で検出された遺構が、地点を越えたひろがりとして考えることを出来るようになる成果を得た調査ではある。

ただ本年度調査出土遺物は、未だ整理途上にあるものが大半で、とりあえず現時点で可能な分だけの資料を掲げておく。

Fig. 1 板付及周辺遺跡調査区（1：7500）

II　B11a区調査の概要

調査の経過と概要

調査区は警察学校台地北東端に位置し、西半部は削平されてしまっているが、洪積台地に、東半部は沖積地となっている。沖積地部分は水田遺構の調査後、約 500㎡について矢板による水切りを行なって下位の遺構の調査を行なった。検出遺構は、台地上では、その縁辺に沿うような溝（ＳＤ14・15・23、ＳＫ20）の他に土坑（ＳＫ12・13・28）を確認した以外は、後世の削平により削減している。沖積地部分では水田（Ⅳ層）の下位に、古墳時代の溝（ＳＤ26）、奈良時代の溝（ＳＤ01）、弥生時代の河かと思われるＳＸ29とそれに設けられた遺構ＳＸ30を検出した。遺物は収納用のコンテナにして50箱余りで、土師器と弥生土器が大半を占める。両者の比は３：２位である。以下、時代を追って概要を記す。

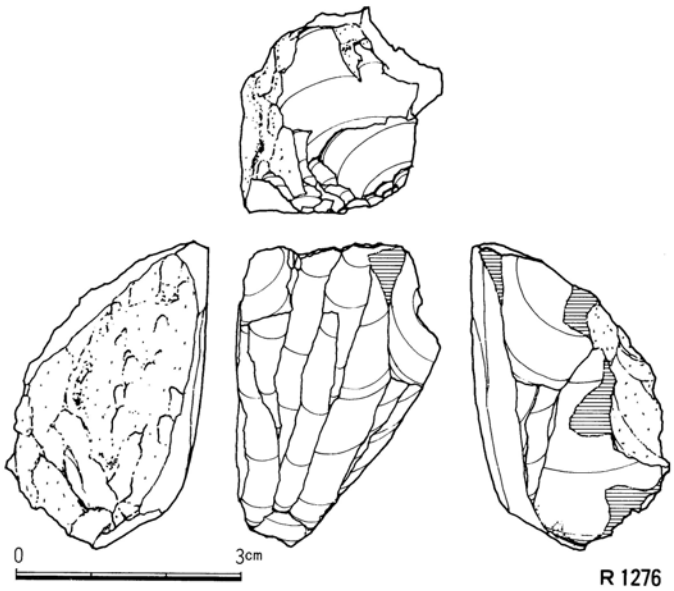
高畑遺跡調査区

調査区（板付周辺調査区）	調査年	出土資料	報告
1次（板付　Ｄ９・10区）	1973	旧河川氾濫原／弥生土器	板付周辺報告1（市報告29集'74）
2次（　　Ａ・Ｂ13区）	1973	遺構なし／弥生土器、瓦、須恵器、土師器	1（　〃　29集　'74）
3次（　　Ｂ12ａ区　）	1975	土坑、杭列／須恵器、土師器、弥生土器	3（　〃　36集　'76）
4次（　　Ｄ10ａ区　）	1979	土坑、溝（8～9ｃ）、溝（5ｃ）／瓦、須恵器、土師器、木器	6（　〃　57集　'80）
5次（　　－　　）	1980	遺構なし	
6次（　　－　　）	1981	遺構なし	
7次　　Ｄ10　区　）	1981	溝（5ｃ、8～9ｃ）／須恵器、土師器、木器	8（　〃　83集　'82）
8次（　　Ｂ12ｂ区　）	1982	溝（8～9c）、土坑、井戸、水田（中世）／須恵器、土師器、瓦、木簡、木器	9（　〃　98集　'83）
9次（　　Ｂ12ｃ区　）	1982	溝（8～9ｃ）、杭列、土坑／須恵器、土師器、瓦、木器	9（　〃　98集　'83）
10次（　　Ｂ11ａ区　）	1984	溝（5ｃ、8～9ｃ）、土坑（13～14）／須恵器、土師器、木器	今回報告
11次（　　－　　）	1984	住居址（弥生後期、5ｃ）、貯蔵穴（弥生前期）、井戸（弥生後期、奈良）	〃

Fig.2　B11ａ区全景（南から）

先土器時代

ＳＤ01から細石核Ｒ1276が出土した。佐賀県腰岳産と思われる黒曜石を使用し、細刃器剝離作業面を基準にして、下縁・後縁をもつ。ために打面は丸味を帯びた三角形状を呈し、かつ後方に傾斜する。細刃器剝離作業の加撃点は、打面調整により除去される。一側面に原礫面を残している。全体に、磨耗しておらず、西に接する警察学校台地よりの洗い出しと思われる。



Fig．３　先土器時代の遺物(１：１)

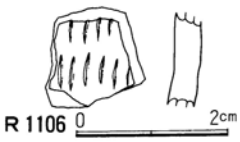


Fig.4　縄文時代の遺物(１：２)

縄文時代

遺構はないが、ＳＫ20から縄文土器と思われる土器細片Ｒ1106が出土した。器形は不明であるが、外面に２条の横走する瓜形文を施す。胎土に粗砂粒を多く含み明褐色を呈す。細片のため時期の限定はできない。

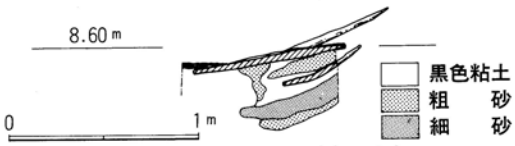


Fig.5　ＳＸ30（東から）

弥生時代

遺物総量は、本調査区出土遺物の30%余りを占めるが、その殆どは後世遺構、特に溝の水流による洗い出しである。その遺存状態は良好で、大きな移動量は考えられず、台地上に該当時期のつまり弥生時代全般にわたる遺跡の立地が窺える。台地上に遺構は遺存しない。調査区東辺に露出する砂の堆積は、この時代の末に形成された可能性が大きい（ＳＸ29)。又、ＳＸ29砂層中から深掘り部においてＳＸ30を検出した。

ＳＸ30　ＳＸ29中の検出である。棒状の木材を並べその上下に藁のようなものを敷き並べた状態が２段みられる。全体が西へ向かって倒れかかった状態を示している。しがらみ状の遺構である。構築材の一部に木製品が利用されている。Ｒ1275はＳＸ29出土の甕である。胎土に石英粒

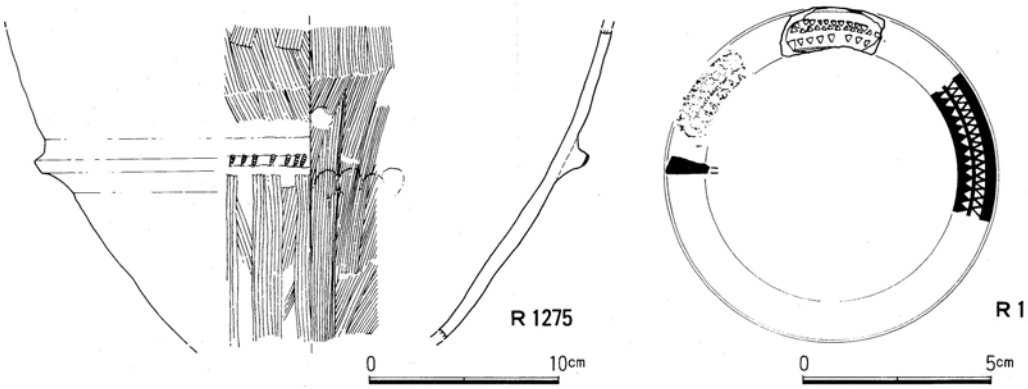


Fig.6　弥生時代の遺物(１：４　、１：２)

を多量に含み黄褐色を呈す。

R1277は中世遺構検出の銅鏡片である。外区部分で、図上復原径8.9cm、縁部厚さ0.5cmを測る。縁部は大部分剥落している。

古墳時代

台地上に遺存する遺構はなく台地に沿って沖積地を南流するＳＤ26を検出した。遺物は他に後代の遺構、特に奈良・平安時代の溝からも多量に出土している。本調査区出土遺物中最も多く、総量の60%はこの時代に属する。

Fig.7　ＳＤ26Ｂ全景(東から)

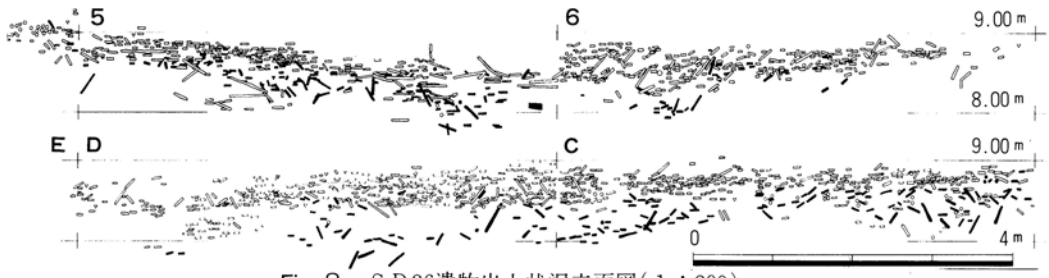
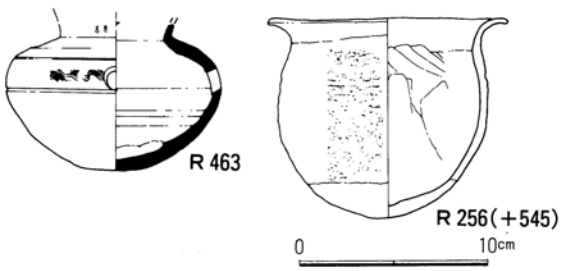


Fig.8　ＳＤ26遺物出土状況立面図（１：200）

ＳＤ26　矢板内の調査区と北側トレンチとで調査を行なった。北側トレンチから東南へ向い、Ｃ６区・Ｃ７区で南へ曲がる。その南端部は、後世のＳＤ01により削除されている。規模は、最大幅14ｍ、深さは調査区中央の最深部で1.3ｍを測る。断面は西岸でやや急な東岸で極く緩い傾斜を成している。覆土は、砂混り部分を間層にもつ黒色粘土で、増水時の水流があるだけの様な状態が考えられないだろうか。調査時点では、上記の様にある間層を境に上位をＡ、下位をＢとして分離した。遺物は西岸寄りに集中し、大量の流木、木片に混じって多数の木製品、土器が出土した。このような出土状況、及び出土土師器の構成及び特徴は、Ｄ10ａ区、Ｄ10ｂ区のＳＤ01のそれとよく似ており、これらがひとつづきの流れであったことを示唆して いる。

Fig.9　甑出土状況



遺物には、土師器に加えて須恵器の出土があったが、出土状況・器形の明確なものは甑（Ｒ463)がある。又、二次的な熱を受け、製塩土器かとも考えられる資料Ｒ545がある。玉類（Ｆig･10）は、滑石製盤状の資料がある。木製品は、鍬類を主に約240点出土した。整理途上であるが、保存上の問題があり、現状を写真で示しておく。

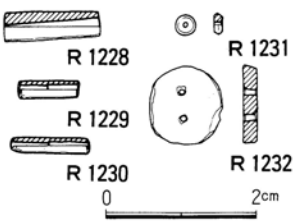
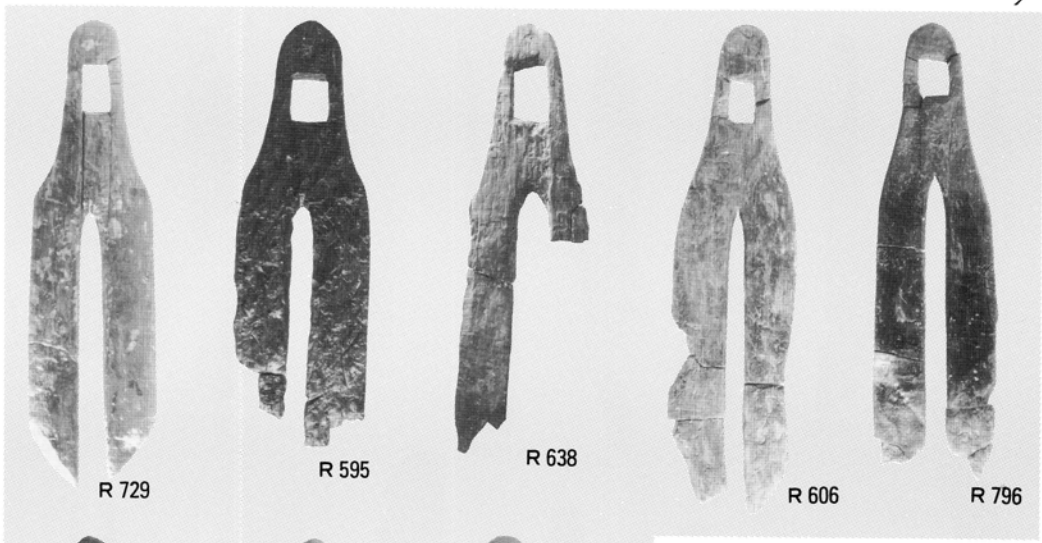
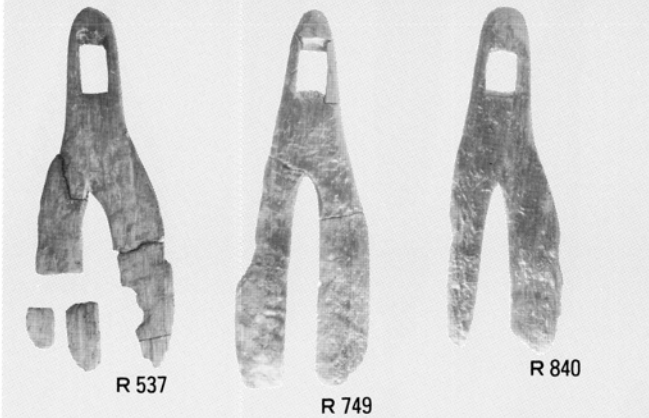


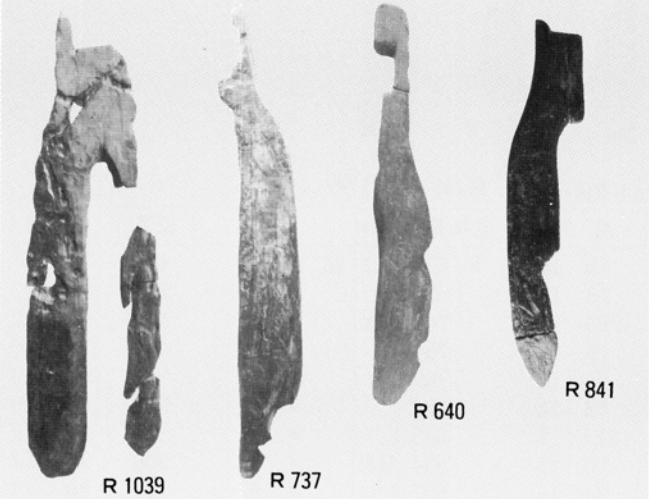
Fig.10　ＳＤ26出土遺物

Ｒ256＋545	土師器	甕　完存　二次的被熱	径12.7
Ｒ1110	須恵器	甑　胴部完存	11.5
Ｒ1228	管玉	片方向からの穿孔　碧玉製	0.8
Ｒ1229	管玉	両方向からの穿孔　蛇紋岩製	0.5

Ｒ1230	管　玉	両方向からの穿孔、蛇紋岩製？	0.4
Ｒ1231	臼　玉	片方向からの穿孔、滑石製	0.6
Ｒ1232	有孔円盤	対向する片方向からの穿孔、滑石製	2.0



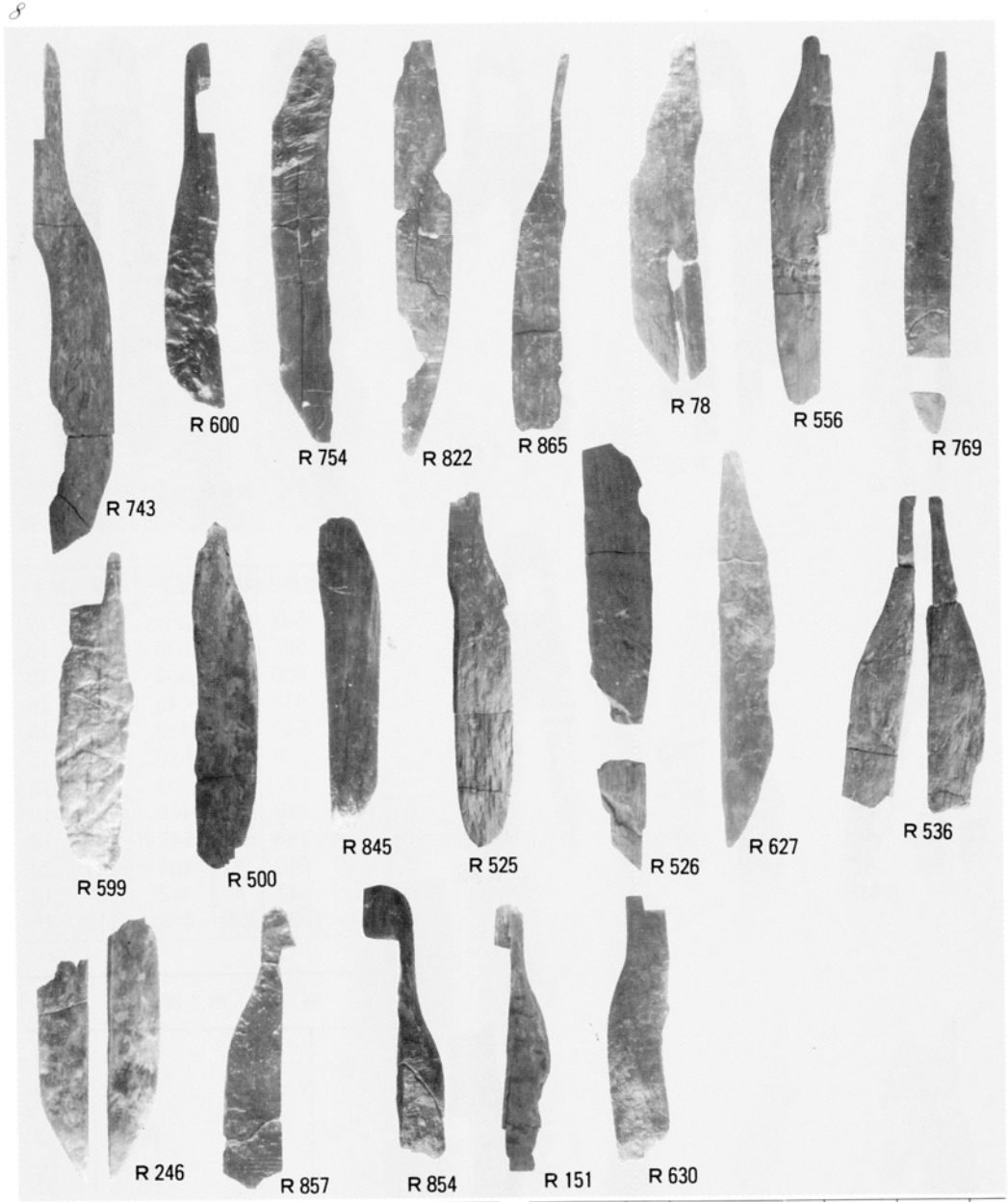




遺物番号	撮影面	長さ	幅	厚さ
R 537	前面	367	141	19
595	〃	535	156	19
606	後面	562	147	12
638	〃	449	132	16
640	前面	422	81	16
729	後面	520	146	12
737		504	94	18
749	前面	446	161	16
796	後面	545	146	18
840	〃	405	141	20
841	〃	382	87	13
1039	前面	478	116	18

木器の種類		図
鍬	二又	1・2
	三又	3
	又鍬	3
	平鍬	3
	広鍬	3
ナスビ形木製品(二又)		3
鋤		4
フォーク状木器		4
柄		4
砧		4
杵		4

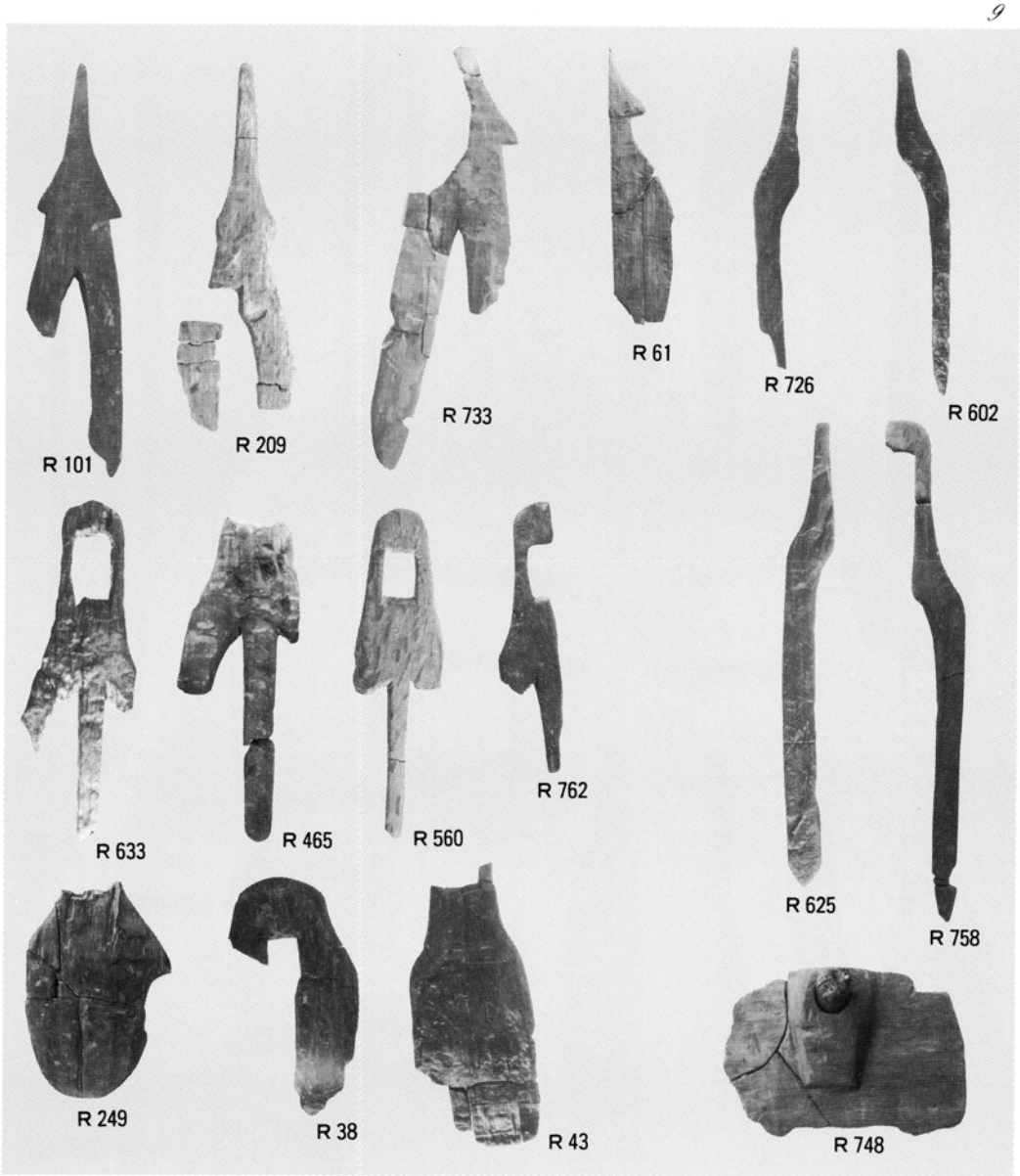
Fig.11　SD26出土木製品 1



遺物番号	撮影面		長さ	幅	厚さ
R 78		鍬・二又	357	85	14
151		〃	280	68	16
246		〃	312	129+	15
500		〃	364	75	16
525	後面	〃	391	74	15
526		〃	428+	73	12
536		〃	334	121+	12
556		〃	384	70	21
599	前面	〃	318	94	18
600	〃	〃	436	83	18

遺物番号	撮影面		長さ	幅	厚さ
R 627	後面	鍬　二又	475	74	17
630		〃	296	80	17
743	後面	〃	547	84	22
754		〃	467	75	16
769		〃	521	63	19
822		〃	521	63	19
845		〃	322	71	12
854	後面	〃	306	90	17
857	〃	〃	311	80	17
865		〃	422	61	13

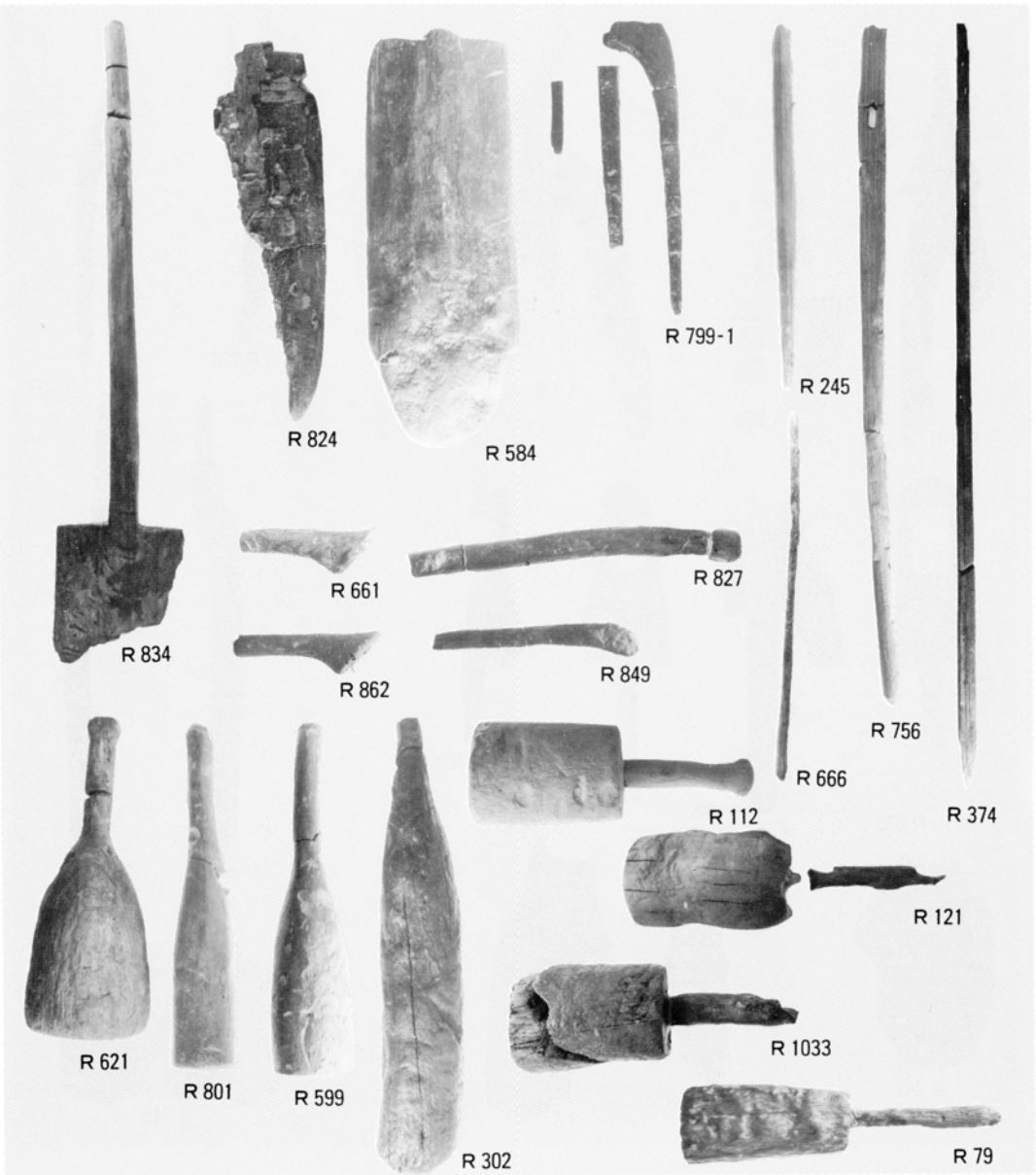
Fig.12　ＳＤ26出土木製品２



遺物番号	撮影面		長さ	幅	厚さ
R 38		平鍬	248	133	13
43	後面	〃	595	130	14
61		ナスビ形木製品(二又)	292	73	13
101		〃	479	104	16
209		〃	461	102	14
249		平　鍬	232	158	10
465	後面	鍬　三又	325	121	17
560	〃		335	90	19

遺物番号	撮影面		長さ	幅	厚さ
R 602		鍬　三又	409	71	15
625		又　鍬	460	62	14
633		鍬　三又	333	115	13
726		〃	381	60	15
733		ナスビ形木製品(二又)	455	148	12
748	前面	広　鍬	176	254	44
758	後面	又　鍬	532	97	20
762	〃	鍬　三又	279	72	12

Fig.13　ＳＤ26出土木製品３



遺物番号	撮影面		長さ	幅	厚さ
R 79		砧	330	φ 81×56	
112		〃	262	φ 97×86	
121		〃	334	φ 103×74	
245		柄 ?	401	26	9
302		杵	461	φ 87×69	
374		柄 ?	1720	40	20
559		砧	356	φ 83×76	
584	背面	鍬	467	178	27
621		砧	305	φ 121×84	
661		柄頭	127	19	—

遺物番号	撮影面		長さ	幅	厚さ
R 666		柄 ?	400	13	16
756		〃 ?	719	24	17
799-1		フォーク状木器	344	133+	18
801		杵 ?	388	φ 77×69	
824	腹面	鋤	711	104	22
827		柄尻	300	38	24
834	腹面	鋤	615	116	31
849		柄	214	39	8
862		柄頭	144	21	—
1033		砧	278	φ 103×63	

Fig.14　SD26出土木製品4

奈良・平安時代

調査区に西接する台地上に立地を推定される高畑廃寺に関係する、と思われる遺物を出土する遺構が、台地縁辺部及び沖積地に遺存している。沖積地ではＳＤ01が、台地縁辺部にはそれに沿うようにＳＤ14・ＳＤ15・ＳＤ25が検出された。又、ＳＫ20・ＳＤ23も判然とはしないが、そういった溝のつづきである可能性が考えられる。

Fig.15　ＳＤ01Ｃ全景（東から）

ＳＤ01　南70ｍのＢ12ｂ区から台地縁辺に沿って北流してくると考えられる溝である。ＳＤ01は、調査区中央部台地突出部で略直角に向きを変え東流する。この部分で古墳時代の溝ＳＤ26を断ち切っている。本区でもＢ12ｂ区同様上位からＡ・Ｂ・Ｃの３区分ができた。この区分はＳＤ01の変遷過程を示しているような、水量豊富なＣの時期から、水量の減少に対応し搬送する土砂が細かくなってゆくＢの時期、淀み状を呈するＡの時期と変遷したものであろう。規模は、東岸が調査区外にあり、不明だが、深さは屈曲部の最深部でＣの段階に1.5ｍを測り、これがＡの段階に至ると0.7ｍと浅くなる。

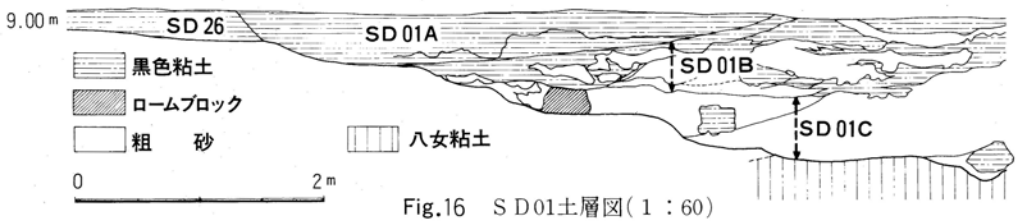


Fig.16　ＳＤ01土層図（１：60）

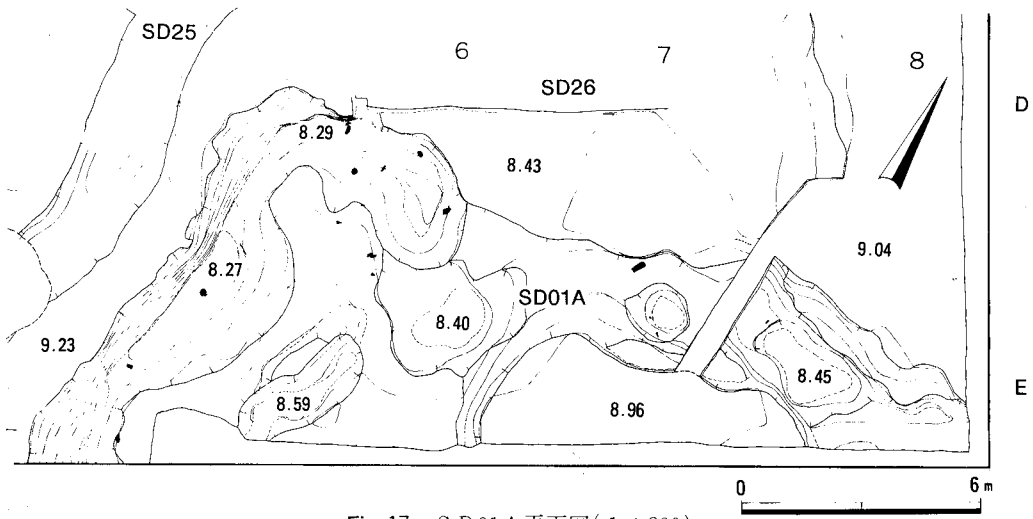


Fig.17　ＳＤ01Ａ平面図(１：200)

遺物　土器類の総量は、コンテナ８箱程であるが、その90%近くが水流による洗い出しの古墳時代、弥生時代の遺物で、残ったものをA・B・Cに区分すると１：１：２の割合となる。このようにB12b区と比べると格段に遺物量が少なく又、B12b区で多く出土した瓦、塼の類もいわば痕跡程度であり、土器類も小破片が大半を占める。B12b区が寺院により近接していたことが考えられよう。土器類の構成は、図示しないものを含めてB12b区と同様である。B12b区の分類でいうならば、土師器では坏A、坏B、坏C、蓋、皿という類、須恵器では、坏A、坏B、蓋、皿、高坏、鉢に加え壺という類がある。更にA類の黒色土器がBから、緑釉碗が南側トレンチ部から出土している。土器についてこれ以上の分類は、出土点数の少ないこともあって行なっていない。資料個々の説明は、表として実測図に付す。

R－ 21	A	須恵器	坏蓋	ほぼ完存 径14.0
30	B	土師器	坏A	上半部 30.4
35	B	〃	〃	外底部ヘラ削り調整 17.2
1236	C	鞴羽口		半ば欠損 7.5
1248	B	須恵器	坏	墨書 破片(¼) 12.5
1251	B	〃	〃B	墨書「刀」 破片(½) 13.9
1252	B	〃	〃A	ヘラ記号 破片(¼) 14.4
1255	C	〃	〃A	墨書「丹」 14.6
1256	B	土師器	碗	体部破片(⅛) 10.8
1258		緑釉	碗	底部破片(½) 7.6
1259		黒色土器A類	碗	口縁部破片(⅛) 11.7
1261	C	須恵器	壺	頭部欠 7.6
1262	C	〃	坏B	破片(⅓) 9.6
1263		〃	鉢	口縁部破片(¼) 8.4

R－1264	C	須恵器	坏B	径17.9
1265		土師器	〃D	完存 9.7
1266		〃	〃A 墨書	〃 13.6
1267		〃	〃A	破片 19.2
1268		〃	〃A	完存 19.2
1269		〃	皿	ほぼ完存 19.4
1270		須恵器	〃	破片 19.3
1271		〃	蓋	ほぼ完存 15.6
1272		土師器	〃	完存 13.0
R－1111		鉄斧		袋部一部欠
1233		土師質	土錘	完存 1.2
1234		須恵質	〃	〃 1.7
1235		土師質	〃	〃 2.3

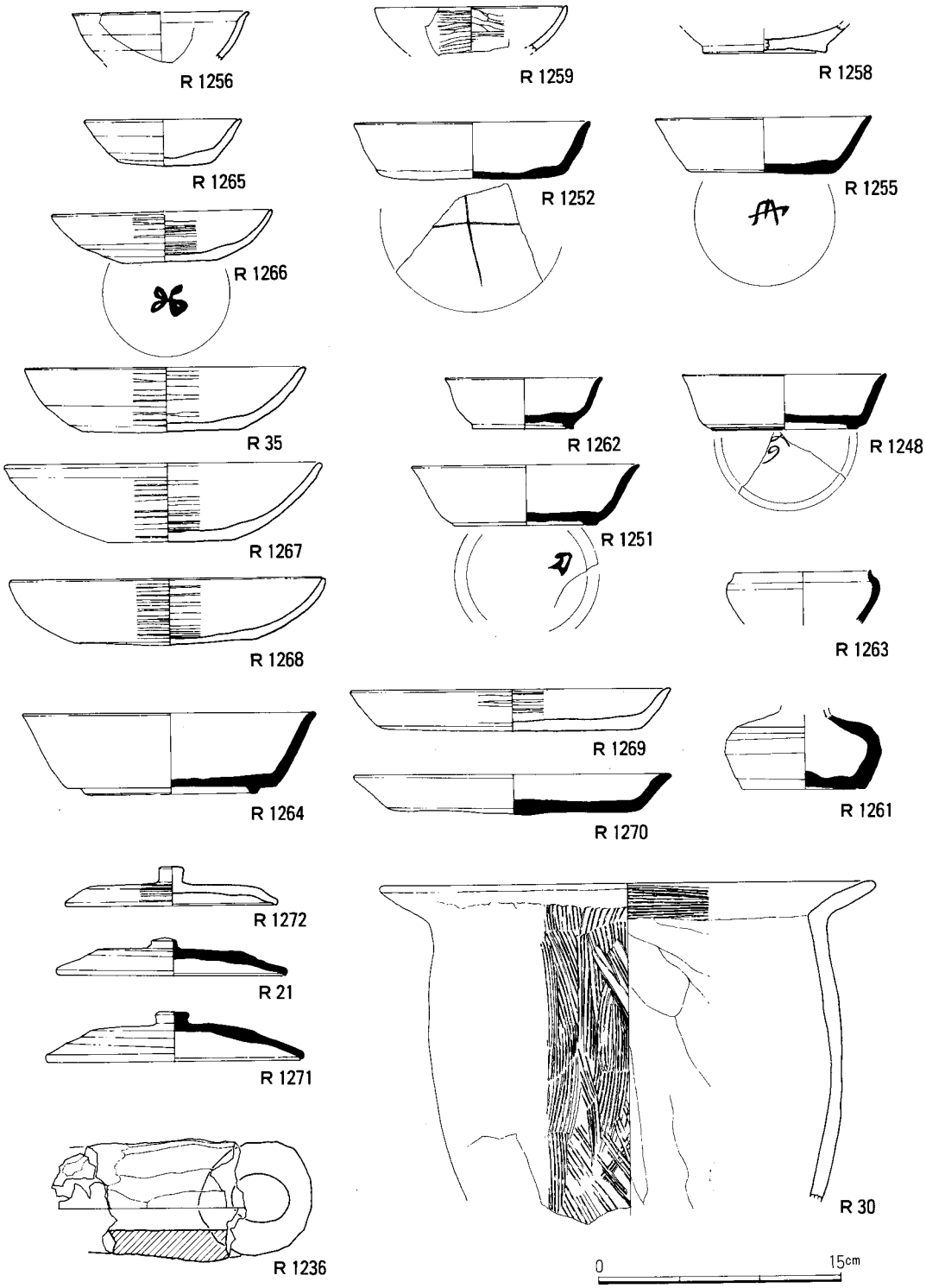


Fig.18　ＳＤ01出土遺物(１：４)

土器以外の土製品として鞴羽口と土錘とがある。前者には、鉄銹様のものの付着が認められる。後者には２者あり。土師質（R1235・1233）と須恵質（R1234）とがある。金属製品としては、小形の鉄斧が出土した。袋部が一部欠けている。刃縁が弧状を呈する。

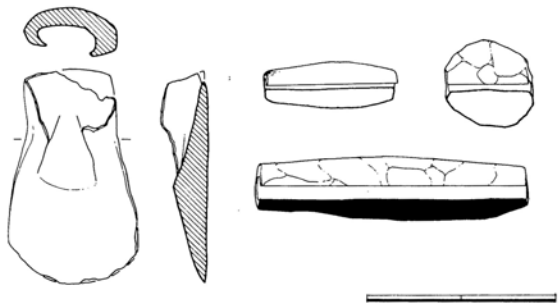


Fig. 19　SD01出土遺物（１：２）

墨書土器　実測図を示すものの他に16点を認めた。甕胴部に描かれたR545の他は、すべて坏底部外面に書かれている。坏に書くもののうち、土師器のそれ４点に対して須恵器のそれは15点と、明らかに須恵器の方が多い。これはB12b区の墨書土器と同様の傾向である。また墨書の種類であるが「刀」と記す例が最も多く４点、次いで「○」、「鳥」と記すものが、それぞれ２点ある。以上３種の墨書はB12b区でも出土している。更に一筆書き様の例も、B12b区によく似た例がある。墨痕の不明瞭な例は別として、「田」そして「丹」とあるもの各一点づつの出土があった。以下に墨書の写真を掲げる。

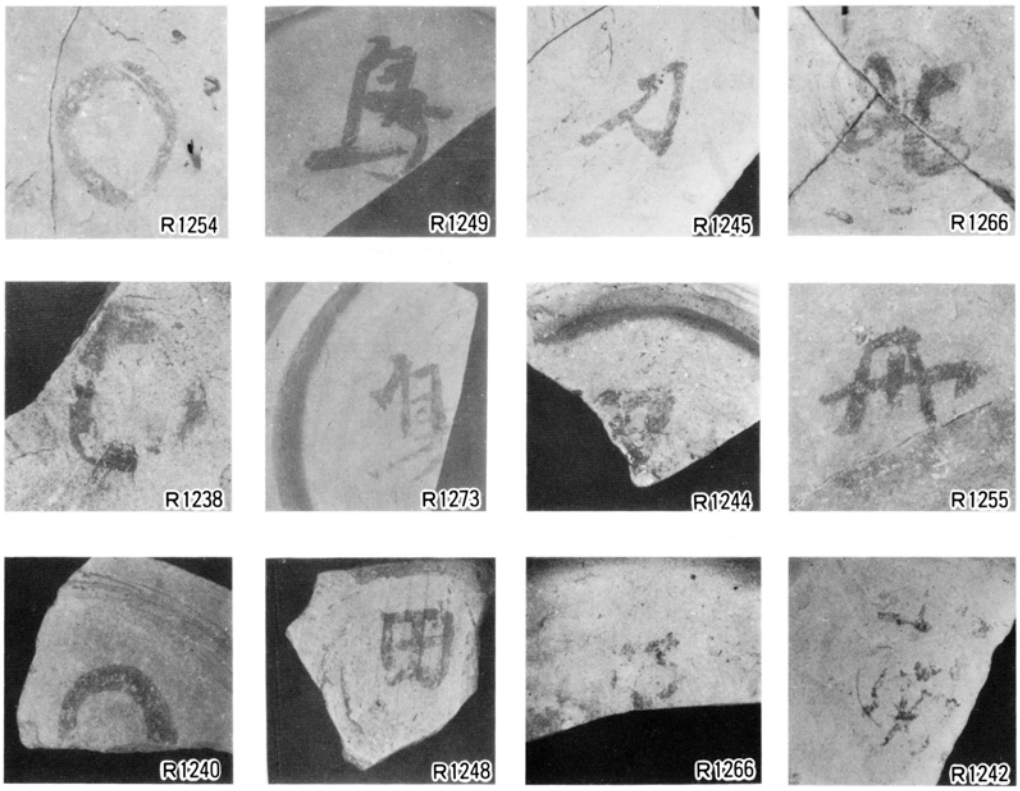
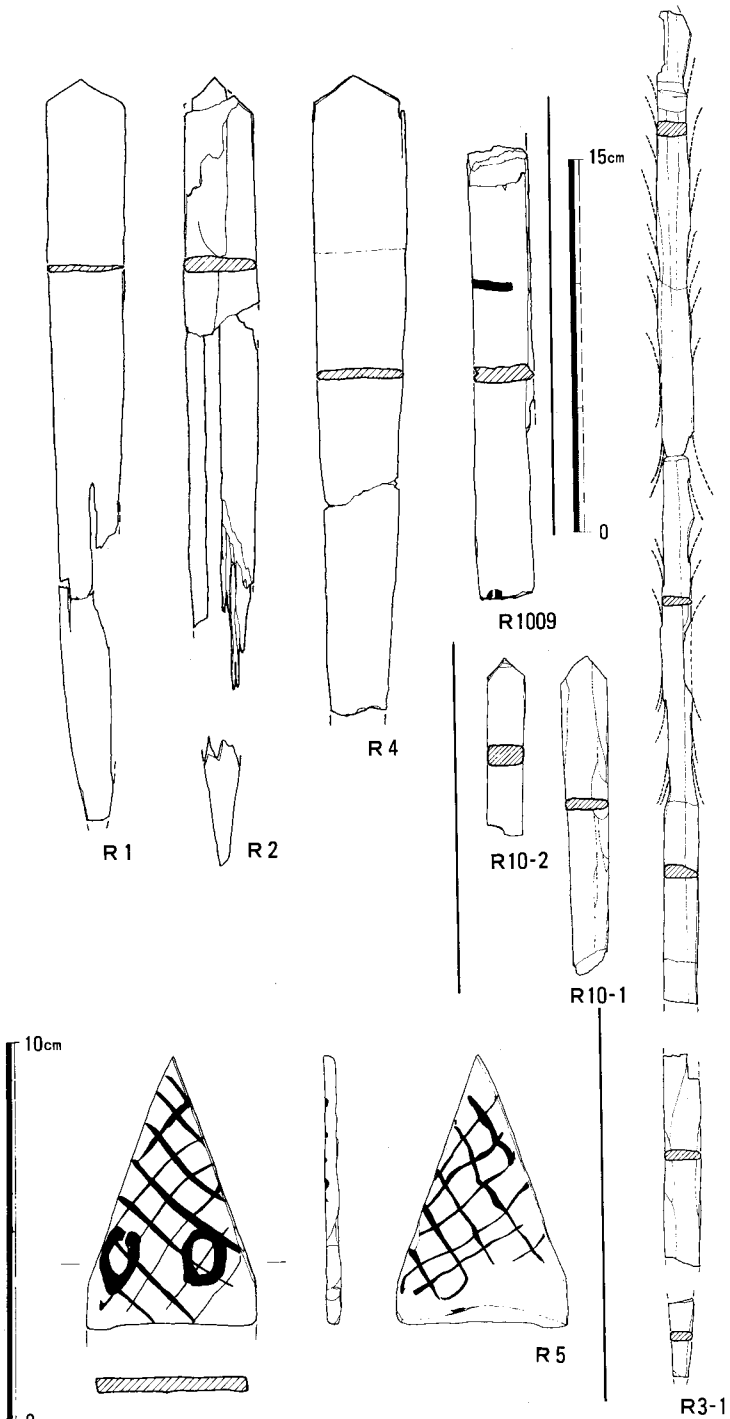


Fig. 20　墨書



R－1	木簡 長さ	198㎜
2	木簡	165＋
3-1	斎串	401＋
3-2	斎串	206
4	木簡	170
5	不明	
	墨書	73
6	斎串？	99
10-1	斎串？	129
10-2	斎串？	73
11	斎串？	327
1009	木簡	
	墨書	122

Fig. 21　ＳＤ01出土木製品１

Fig. 22　曲物出土状況（東から）

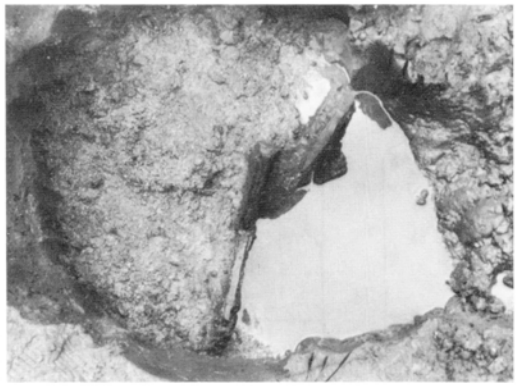


Fig. 23　斎串出土状況（北から）

木製品　板材状のものを除く資料は22点出土した。そのうち14点が曲物及びその部分である。底板の形状からする限り、円形のものと長方形のものとがある。出土状況を示すＲ９は円形の曲物で略完形で出土した。

木簡は３点ある。墨書はみられず、形状でそれと判断した。他に三角形で碁盤目状の墨書を描くものがある。

斎串は同一個所から複数個体がまとまって出土した。３点を数える。

他の未分類の木製品もあわせて、その殆どはＳＤ01Ａよりの出土である。

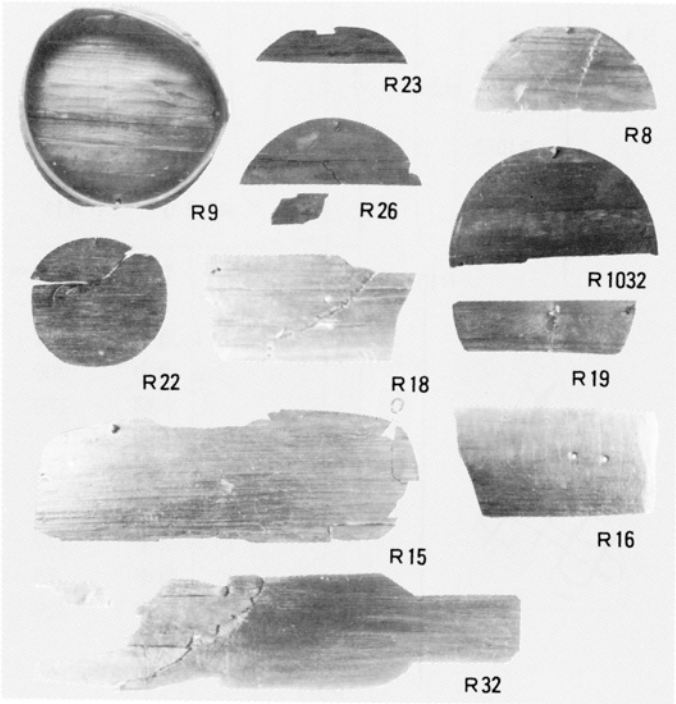


Fig. 24　ＳＤ01出土木製品２

	曲　物
遺物番号	
Ｒ－　8	193×93×13 内面　ケガキ
9	（径 220） 内面
15	420×145×６
16	219×520×６ 内面？
18	232×123×６
19	92×68×６ 内面？
22	径 141×４
23	53×39×６
26	83×69×４ 内面
32	512×226×７
1032	198×111×８ 内面　ケガキ

ＳＤ14・ＳＤ15　台地縁辺に沿って走る溝で、互いに近接、重複している。そこでの関係からＳＤ15がＳＤ14に先行することが考えられる。ＳＤ15は、断面形が低い台形状を呈し幅1.3ｍ、深さ0.1ｍを測る。覆土は暗茶褐色である。遺物は数10点の土器細片がある。ＳＤ14は底面が水流により大きく変形し、覆土は砂・シルト・粘土のレンズ状堆積を示しており、流水の増減の繰り返しを、考えられよう。遺物はコンテナ⅓程度の量であった。瓦・塼の類を欠くＳＤ15に対し、総量の½は瓦・塼の類で、残りが弥生土器・土師器・須恵器の小破片である。このうち示準的な遺物として２点が示せよう。Ｒ1117はＡ類の黒色土器で、胎土精良、外面淡褐色内面黒色を呈す。Ｒ1116は高台碗で、胎土に砂粒をわずかに混じえ、外面灰黄褐色、内面茶灰黄褐色を呈する。

ＳＫ20・ＳＤ23　ＳＫ20は断面低い逆台形を呈する。遺物は少量の土器細片が出土した。ＳＤ23はＳＫ20より以前の溝状の遺構である。ＳＫ20が長方形状を呈するのに対し、不整な部分が目立つ。極く浅く、覆土はＳＫ20に同じくロームブロックを混じえた茶灰色粘質土である。少量の遺物が出土する。瓦の細片を含んでいる。ＳＫ23については、平面図上の関係より、ＳＤ14のつづきである可能性がある。

ＳＤ25　台地縁辺の沖積地を巡る溝である。調査区南部では、ＳＤ15とＳＤ01に挟まれた位置にありかつ、これらと平行している。台地突出部で西寄りに向きを変え調査区外に向かう。付図土層図に示すように、砂と黒色粘土の互層により埋没しており、その段段でも

Fig. 25　ＳＤ14・ＳＤ15（北から）

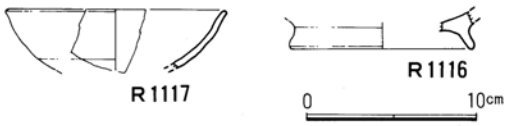


Fig. 26　ＳＤ14出土遺物

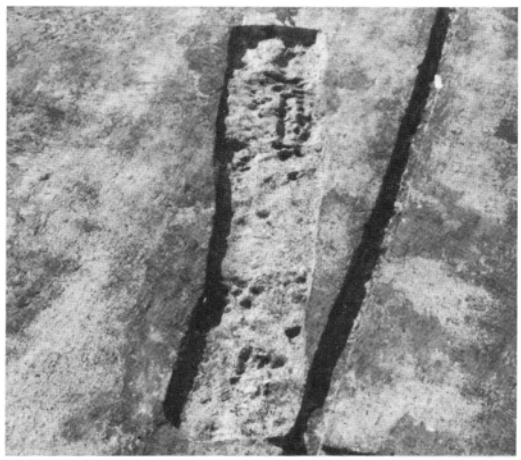


Fig. 27　ＳＫ20（南から）

Fig. 28　ＳＤ25（南から）

流水のあったことが考えられる。こういった状況は特に北半部に顕著である。全体として断面は低い台形状を呈し、幅２ｍ前後、深さ0.4ｍを測る。遺物はコンテナ１½箱程の出土量であった。遺物には洗い出しによる弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器を主に奈良時代までの遺物に混じって土師器高台碗が出土した。R1121は口縁部細片、R1122は底部破片である。いずれも胎土は精良、内外面とも淡褐色を呈する。

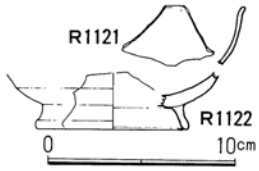


Fig.29 ＳD25出土遺物（1：4）

Fig.30　ＳD25（北から）

ＳK28　平面形不整な楕円形の土坑である。肩近くの壁は直立する。長さ3.9ｍ、幅2.8ｍ、深さ1.4ｍを測る。覆土は最上部が灰色シルトで以下は砂と茶褐色粘土の互層となる。ＳK28はＳD25と重複している。ＳD25がＳD28に先立つものである。遺物は覆土中より散慢に出土した。総量はコンテナ⅓程である。土師器が⅓、瓦・塼が⅓を占める。

Fig.31　ＳK28（東から）

				径
R1223	土師器	碗	底部破片(⅔)	7.3
1224	〃	〃	〃 (¼)	7.5
1225	〃	〃	口縁部細片	
1226	青磁	碗	越州窯系底部破片(⅓)	8.0

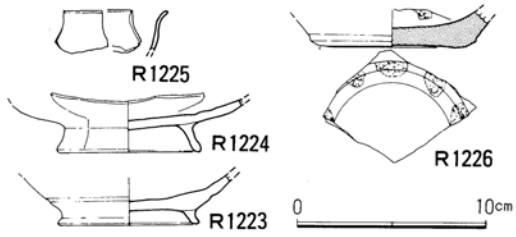


Fig.32　ＳK28出土遺物（１：４）

中世　土坑ＳK12、ＳK13を検出した。

ＳK12　不整な土坑で、複数の土坑が連接したような平面形状である。断面形は鉢状を呈する。長さ9.6ｍ、幅5.3ｍ、深さ0.6ｍを測る。覆土は、上部が暗茶褐色土で下部になるに従い灰色味が強くなってくる。遺物は覆土中より散慢に出土した。高畑廃寺の礎石と思われる花崗岩大礫が底で検出された。

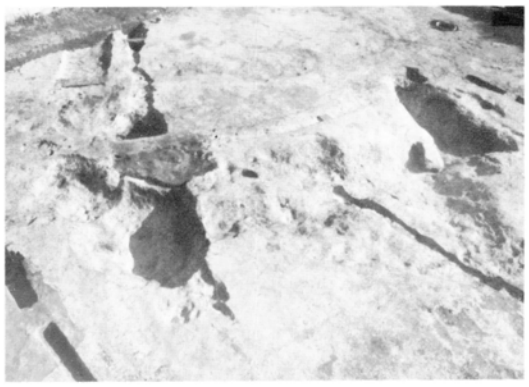


Fig.33　ＳK12・ＳK13（北から）

R1003	瓦質火舎　口縁部細片	
1004	〃 擂鉢　体部細片	
1112	土師質鍋　口縁部破片(½)	径 27.6
1113	白磁　灰緑色味ある釉 碗　底部破片(¼)	5.2
1114	青磁　(龍泉窯系)明灰緑色の釉 〃　底部細片	7.2
SK13 1115	青磁　碗(龍泉窯系) 茶緑色釉 底部破片(½)	
1119	白磁　碗　淡緑灰色やや濁 底部破片	

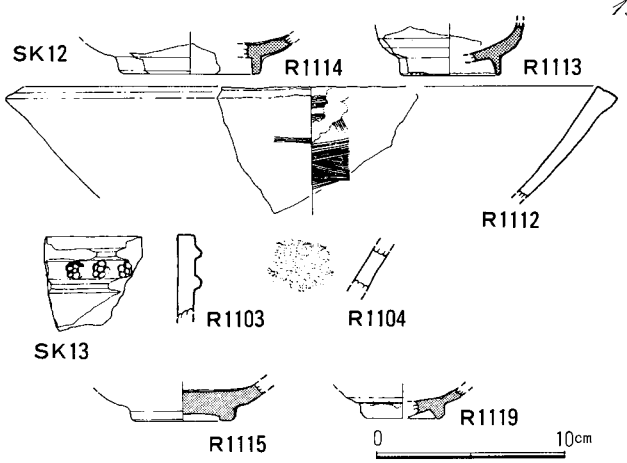


Fig.34　ＳＫ12・ＳＫ13出土遺物（１：４）

ＳＫ13　不整な楕円形状を呈する土坑である。長さ4.1ｍ、幅2.5ｍ、断面鉢形を呈し深さ0.8ｍを測る。覆土の性状はＳＫ12に同じで、同様覆土中から遺物が散慢に出土した。弥生時代から奈良時代の遺物に混じって陶磁器が出土している。

Ⅳ層水田　調査区沖積地上で検出した。現水田床土下に砂層があり、これに覆われて水田面が遺存していた。水田面は台地際では不明確であり、調査区東辺部では、段落ちにより断ち切られている。Ａ５区・Ａ６区で畦畔と思われる部分が東西方向に走ることを確認した。それ以外の水田の区画は認められなかった。水田の時代については、東辺部段落ちから土師器高台碗破片の出土があった。

高畑廃寺の遺物　中世の遺構から、高畑廃寺に関係すると思われる遺物の出土があった。

軒瓦　Ｒ1102・Ｒ1101とともにＳＫ12から出土した。軒平瓦である。ともに右行する扁行唐草文を内区主文とするが、後者ではいわば退化している。外区下縁の凸鋸歯文も前者が上向きなのに対して後者は下向きという点で異なる。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は軟質で明灰色或いは淡灰色を呈する。

礎石　ＳＫ12からは、建物礎石とみられる資料も出土した。花崗岩製で現状は半割された状態で、長さ1.45ｍ、幅0.63ｍを測る。やや扁平で、全体を亀甲状に整えているようにみえる。

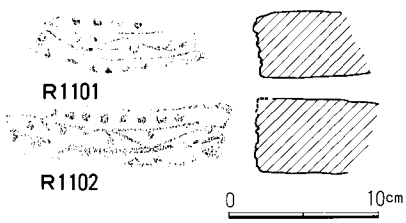


Fig.35　軒瓦（１：５）

III　G 7d 区調査の概要

本調査区は、板付遺跡中央台地南よりの東裾から約100ｍほど西側の沖積地である。1979年に調査を行い、夜臼Ⅰ～板付Ⅰ式期水田を検出したＧ７a・ｂ調査区の西 40ｍにあたる。

1983年、地権者から専用住宅建設の申請が提出され、試掘を行った。遺構の存在が確認されたため、84年７月24日から８月６日まで延べ11日間調査を実施した。調査面積370㎡。

層序

現水田下は、床土・暗灰色砂質土が全体を覆う。道路状遺構ＳＦ01はその直下で検出された。ＳＦ01の東西は灰褐色砂質土が堆積し、とくに東側のばあい、その下に粗砂～細砂がみられる。砂層下は斑鉄を多量に含む水田面（暗茶褐色粘質土）である。ＳＦ01西側は砂層堆積がみられないため、上層との分離は困難であったが、かろうじて水田面を確認した。水田上面レヴェルは標高8.4ｍである。水田土壌下は、暗青灰色シルト、同細砂、灰色砂層となる。地表下2.5ｍまで掘り下げたが、さらに砂層が１ｍ以上下ることが知られた。湧水が著るしく、明り掘削では危険なため掘り下げを断念した。砂層からは弥生中期中葉を下限とする土器が出土し、この頃埋没した河川流路であることが知られる。また調査区西半に、南北方向の灰色粗砂層が深く（3.5ｍ以上）堆積する。弥生後期後半を下限とする土器を包含し、その頃埋没した河川（ＳＤ07）と判断しうる。

検出遺構

道路状遺構（SF 01）、水田（SX 02・04・05）、溝（SD 03）などがある。SF 01と水田は一体の遺構である。直接年代をしめす遺物はないが、弥生後期河川SD 07より新しく、奈良期溝SD 03よりも古い。水田耕土中から７世紀後葉の遺物が出土しており、この前後の使用と推測される。

SF 01は幅３～５ｍと一定しないが、ほぼ南北にのびる。検出面から東西水田との比高は20～30㎝あまりである。

Fig.36　調査区全景（東から）

SF 01東側の水田面には多量の足跡のほか、鋤による耕起痕がみとめられた。調査区東北隅に集中して検出されたが、必ずしも規則的耕起でない。鋤先は幅14～16㎝のU字形である。

奈良時代溝SD 03は、幅４ｍ前後、深さ0.6ｍの深皿状断面形である。福岡条里に等しい方向だが８世紀末頃には埋没している。

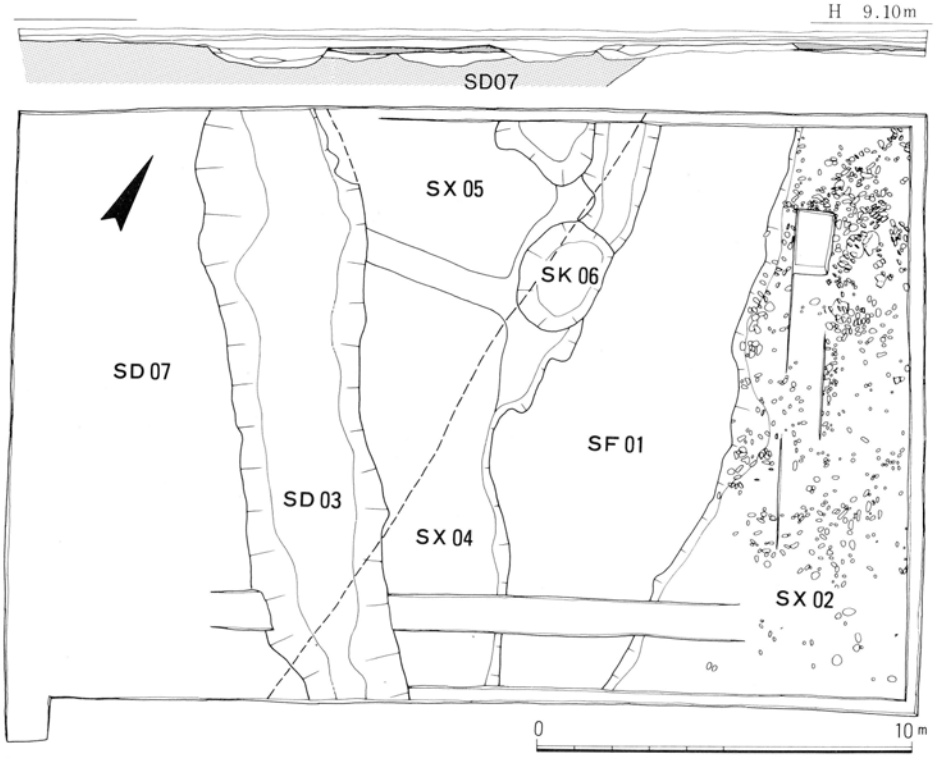


Fig. 37　調査全体図（1：200）

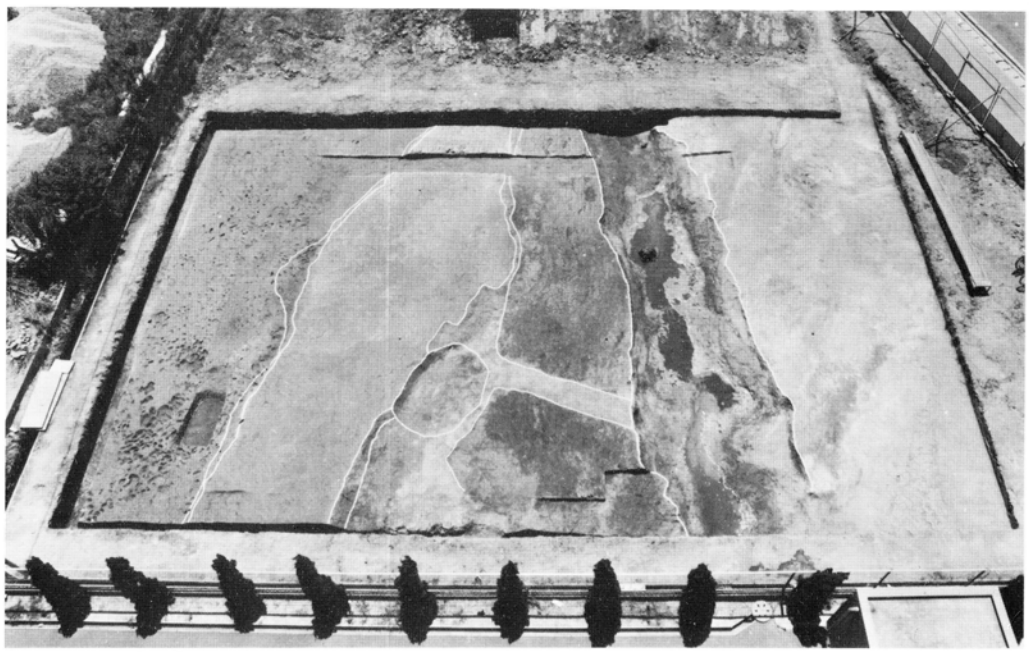


Fig. 38　調査区全景（北から）

Ⅳ　Ｆ７ｆ区調査の概要

調査区の位置・概要　Ｆ７ｆ区は板付遺跡環濠の南端より40ｍ程の位置にある。板付南台地との間の鞍部に向かう傾斜面に位置するため、宅地造成による0.7ｍ程の段差で西側のＦ６ａ区に接している。又、南に接するＦ７ｅ区と略同高度となっている。

調査の結果、弥生時代の貯蔵穴・土坑計10基と住居址１棟、古墳時代の住居址１棟、中世の井戸２基、近世、近代のものを含めて溝２条、他に各時代の小穴を検出、資料を得た。以下、年代順に概要を述べる。

Fig.39　Ｆ７ｆ区全景（西から）

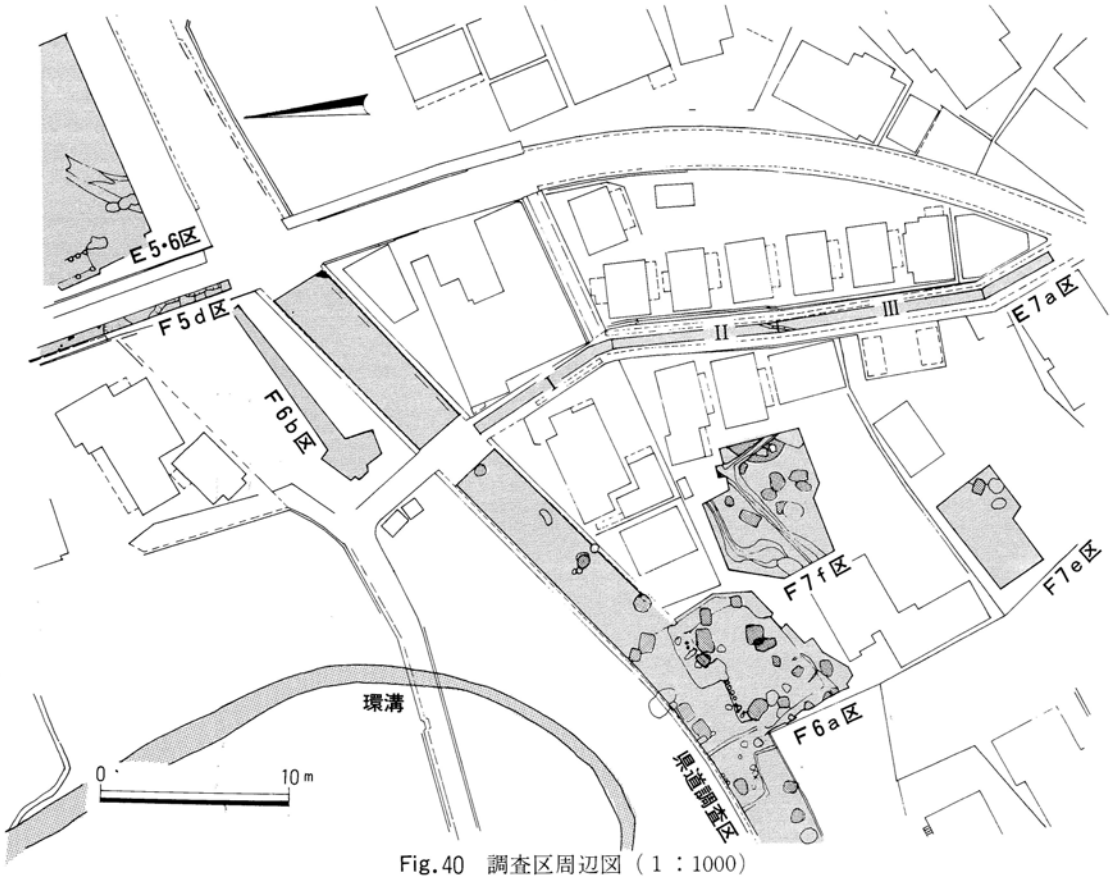


Fig.40　調査区周辺図（１：1000）

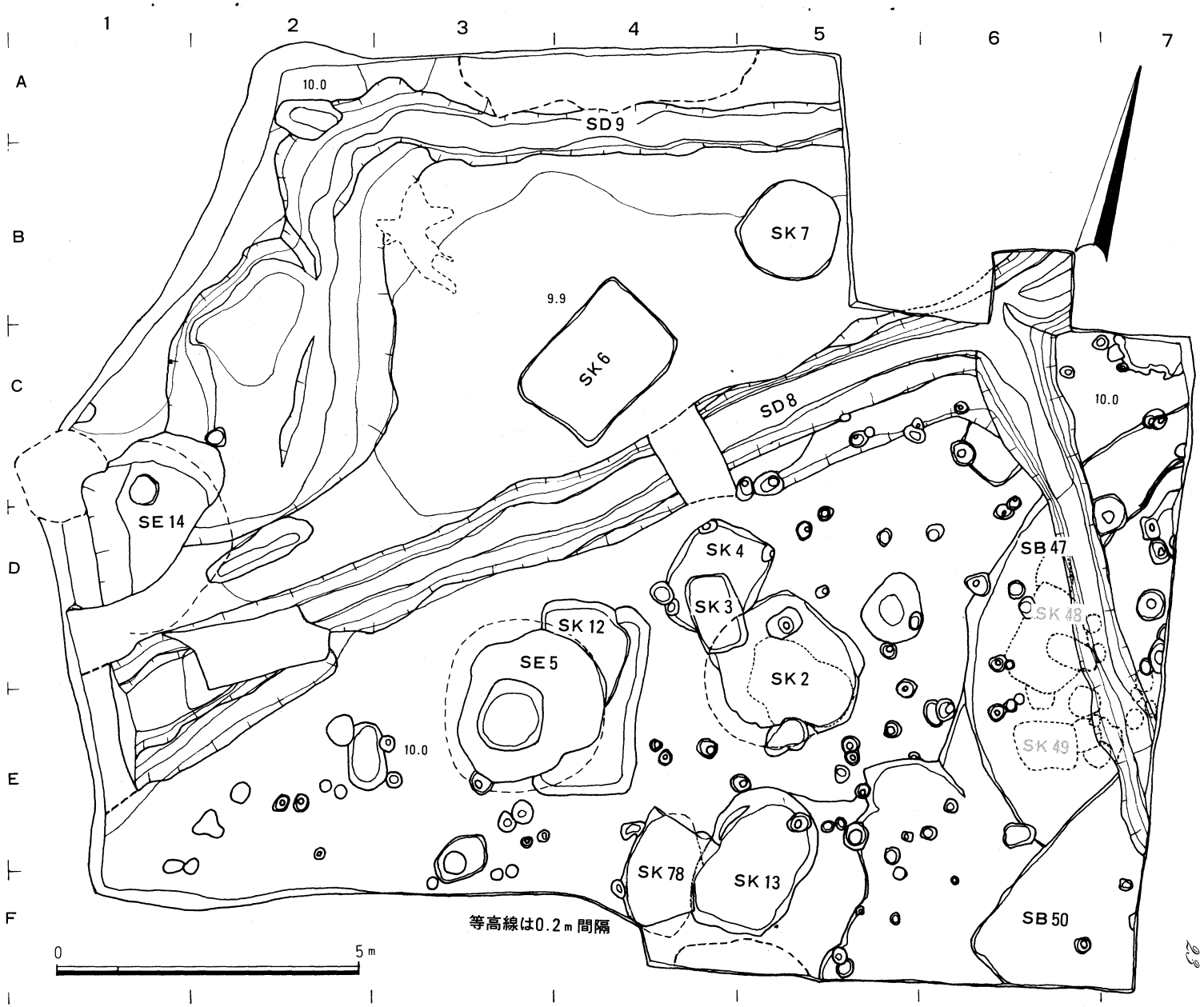


Fig.41　調査区全体図（1：100）

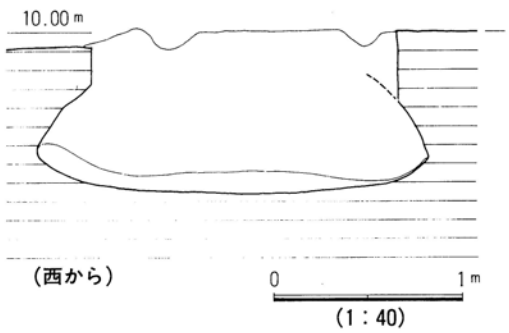


Fig.42　ＳＫ２（北から）

弥生時代　遺構数は前述した通りであるが、貯蔵穴としたものには２者ある。ひとつは円形で袋状を成すもの、他は長方形で壁が直立するものである。形状不明のＳＫ78を除いて前者にはＳＫ２・ＳＫ７・ＳＫ12・ＳＫ13の４基、後者にはＳＫ４・ＳＫ６の２基を挙げることができる。個々について述べる。

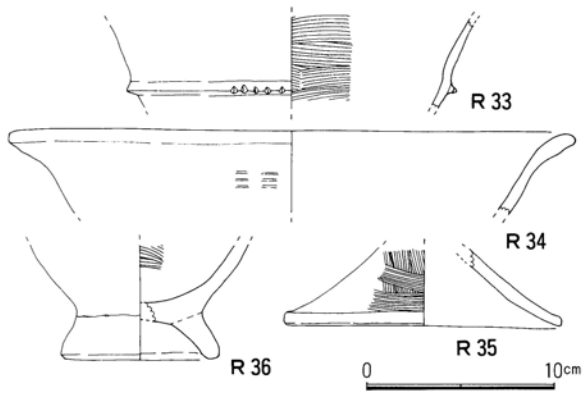


Fig.43　ＳＫ２出土遺物（１：４）

ＳＫ２　平面形が不整な楕円形を呈する袋状の堅穴である。ために断面形は逆台形となる。覆土は黒褐色粘質土でローム粒を顕著に含む。堆積の状況は水平に近い。確認面での開口部は、長さ1.7ｍ、幅1.0ｍ、平面形の最大となる床面で径2.5ｍ、深さ0.9 ｍを測る。遺物は覆土中より散慢に出土した。

				径
R33	弥生土器	甕	胴部破片(¼)	
34	〃	（器種不明）	口縁部小破片	30.0
35	〃	甕	底部小破片	14.6
36	〃	蓋	下部破片(¼)	7.9

Fig.44　ＳＫ４（東から）

ＳＫ４　隅丸長方形を呈する。四隅に柱穴をもち、壁は略直立する。断面形は丸味のある長方形となる。覆土はロームブロック混りの黒褐色粘質土が全体を埋めている。遺物は覆土中より土器細片が出土した。時期は土器より前期が考えられる。柱穴についても同様である。

ＳＫ６　隅丸長方形で、壁は直立し、全体的に箱形を成す。覆土は一部にロームブロックがレンズ状に入る暗茶褐色土である。長さ2.5ｍ、幅1.7ｍ、深さ0.6ｍを測る。遺物は覆土中位に完形あるいはそれに近いかたちで、甕と甑とが計４個体出土した。これより、前期後半の時期が考えられる。個々の説明は、表にし下に掲げる。

				径
R37	弥生土器	甑	(底部に焼成前の穿孔) ほぼ完存	26.5
38	〃	甕	(脚か同一個体の可能性ある底部R80がある)上半部ほぼ完存	24.6
39	〃	〃	外面煤状の付着物、下半部内面にも付着物　ほぼ完存	26.4
40	〃	〃	上半部ほぼ完存	19.8

Fig.45　ＳＫ６（東から）(1：40)

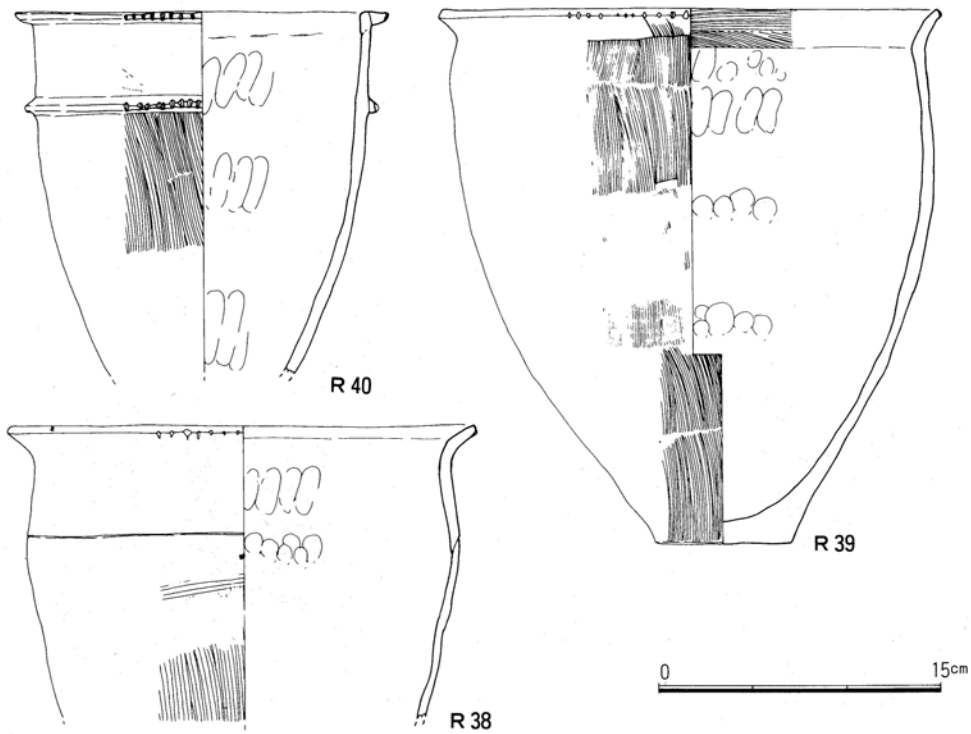


Fig.46　ＳＫ６出土遺物１（１：４）

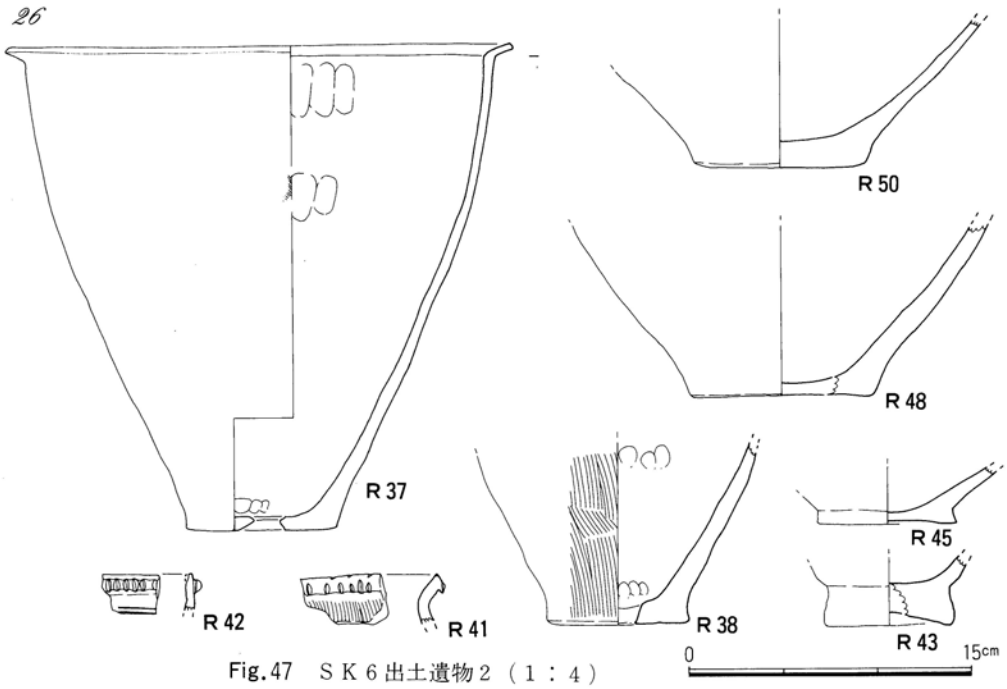


Fig.47　ＳＫ６出土遺物２（１：４）

R30	弥生土器	甑	(焼成後穿孔)底部破片	径 8.1	R45	弥生土器	壺	底部	径 7.3
41	〃	甕	口縁部細片		48	〃	〃	〃	9.4
42	夜臼式土器	〃	〃		50	〃	〃	〃	9.1
43	弥生土器	〃	底部破片(½)	6.6					

ＳＫ７　平面形が不整な楕円形を呈する袋状の竪穴である。おおよその径1.5 m、深さ0.2 mを測る。深さについては、他とは大きく異なり浅く、また比較的小さい。覆土は黒褐色粘質土で、一部にロームブロックを挟んでいる。覆土中より土器片が出土しており、中期が考えられる。

ＳＫ12　半ば以上をＳＥ５により削り取られているが、原状は円形か又は長楕円形を呈していたと考えられる。遺物は少量の土器片が覆土中より出土した。

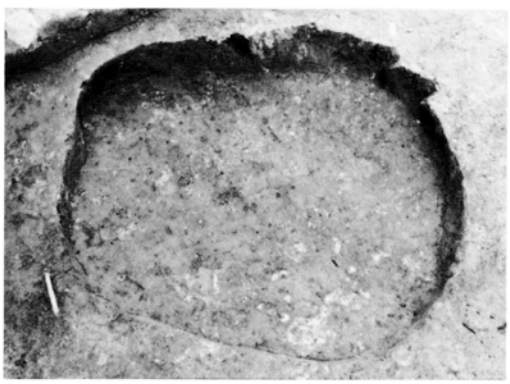


Fig.48　ＳＫ７（西から）

Fig.49　ＳＫ12（南から）

ＳＫ13・ＳＫ78　ＳＫ13は平面形が不整な楕円形を呈する、壁は略垂直に立ち上っている。長さ2.6ｍ、幅1.7ｍ、深さ0.8ｍを測る。覆土は黒褐色土で、部分的に黒色土、ローム粒を混じえる。遺物は覆土中より出土している。ＳＫ78は、調査面では確認できなかった遺構で、ＳＫ13の調査時点で確認した。覆土は黒褐色土でＳＫ13と同じである。残った部分から考えると、袋状の竪穴であった可能性が大きい。

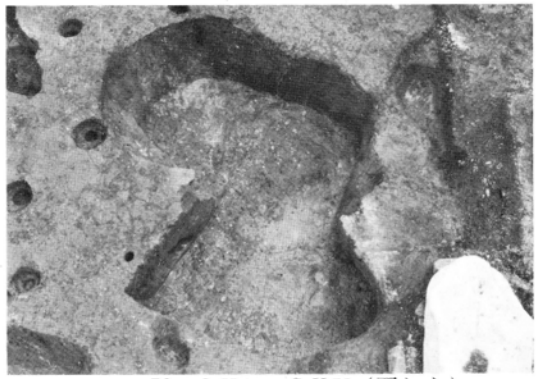


Fig.50　ＳＫ13・ＳＫ78（西から）

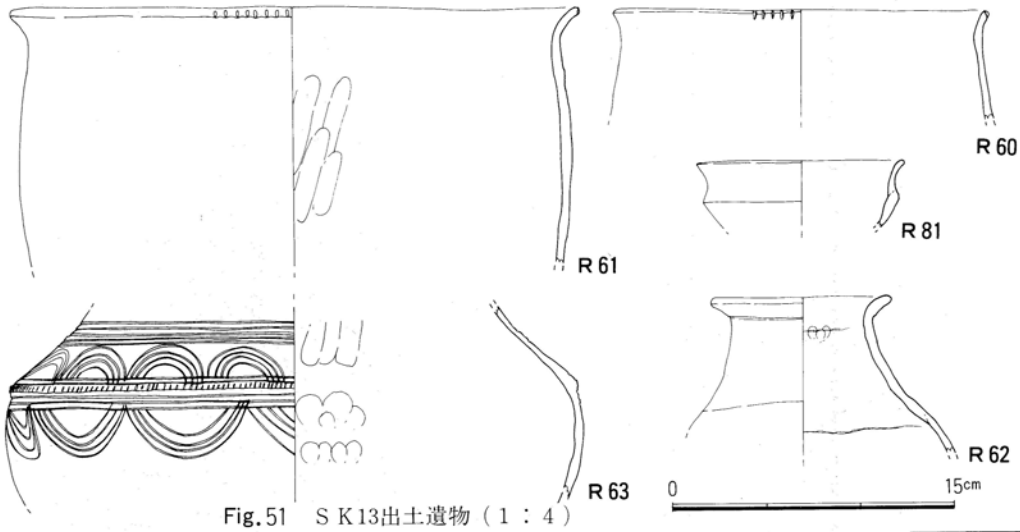


Fig.51　ＳＫ13出土遺物（１：４）

R60	弥生土器	甕	口縁部破片	径20.1	R63	弥生土器	壺	胴部	径30.8
61	〃	〃	〃	30.3	81	〃	鉢	口縁部	11.1
62	〃	蓋	上半部	9.7					

ＳＫ30　東⅓程をＳＤ８により削除されている。平面形隅丸方形を呈する。１辺の長さ１ｍ、深さ0.2ｍを測る。覆土はロームブロックの層下に暗褐色土が堆積する。底面に土器片が密集して出土した。多数個体の破片であるが、前期末までのものである。

R65	弥生土器	甕	口縁小破片	径24.8
66	〃	〃	〃	19.4
68	〃	壺	底部細片	6.8
69	〃	〃	口縁小破片	

Fig.52　ＳＫ30（東から）

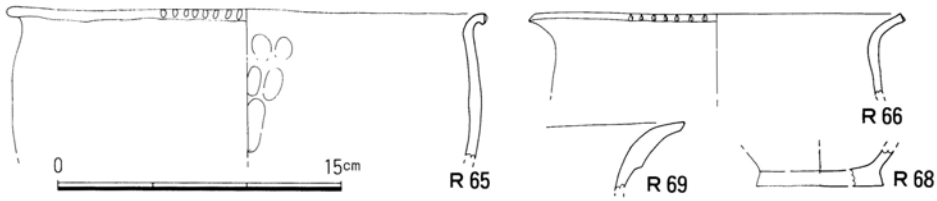


Fig.53　ＳＫ48出土遺物（１：４）

ＳＫ48　ＳＢ47の下位に位置する長方形の土坑である。断面は高い台形状を呈す。長さ1.6ｍ、幅1.3ｍ、深さ0.2 ｍを測る。中期前半の遺物を出土た。

				径
R76	弥生土器	甕	口縁破片(¼)	22.8
77	〃	壺	底部小破片	9.4

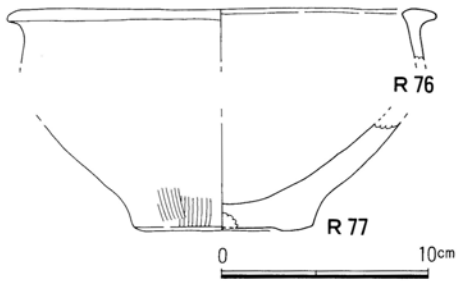


Fig.54　ＳＫ48出土遺物（１：４）

ＳＫ49　隅丸長方形の土坑で断面箱形を呈す。長さ1.1 ｍ、幅0.8 ｍ、深さ0.7 ｍを測る。覆土中より中期の土器が細片で少量出土した。

Fig.55　ＳＫ48（東から）

Fig.56　ＳＢ47（北から）

ＳＢ47　円形の竪穴住居址である。復原径９ｍ、深さ0.2m を測る。これに重なって別の住居址の周溝かと思われる小溝が残る。６及至７本の主柱が考えられる。

				径
R72	弥生土器	甕	口縁小破片	29.6
73	〃	〃	〃	29.4
74	〃	壺	底部小破片	9.0

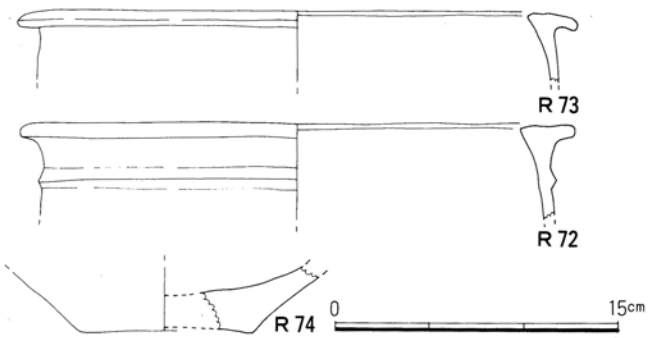
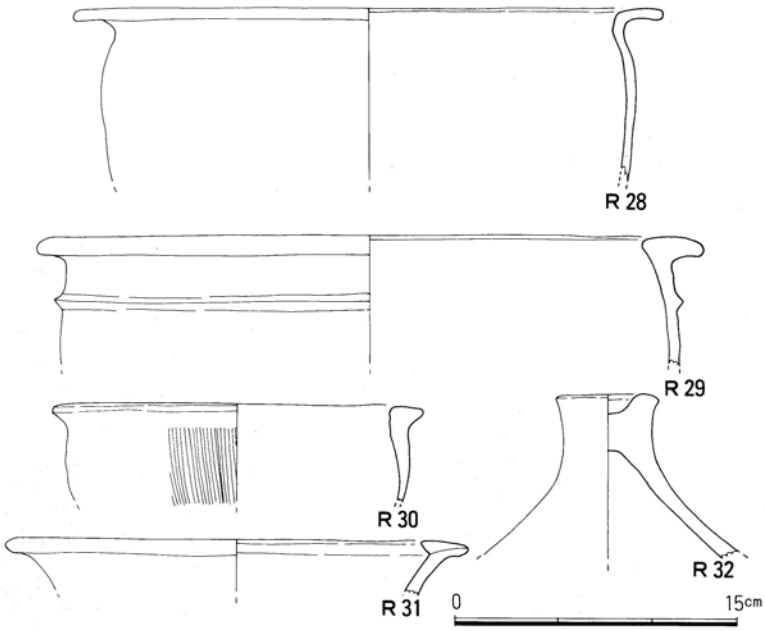


Fig.57　ＳＢ47出土遺物（１：４）

ＳＸ１　調査区東南隅部にひろがる黒褐色粘土の極く浅い落ち込みである。調査時の観察では、ＳＢ47の壁をＳＸ１にかかる部分では追うことができなかったことから、ＳＢ47より形成の新しいことを考えた。遺物は、覆土中より出土し、総量はコンテナ１箱程である。遺物は前期から中期までのものである。Ｆ７ｅ区包含層との関係を考えられる。



				径
R28	弥生土器	甕	口縁部小破片	31.3
29	〃	〃	〃	35.4
30	〃	〃	〃	19.7
31	〃	壺	〃	24.5
32	〃	蓋	上部	5.4

Fig.58　ＳＸ１出土遺物（１：４）

Fig.59　ＳＢ50（南から）

古墳時代　住居址１棟を検出した。

ＳＢ50　方形の竪穴住居址である。深さ0.2ｍを測る。中央近くに焼土を検出した。覆土中より遺物が出土した。柱穴は確実なものは検出できていない。

				径
R21	土師器	小形丸底壺 赤色顔料	完存	10.9
22	〃	高坏 遺存状態不良一部を欠失する		18.1
82	〃	壺	破片	15.0

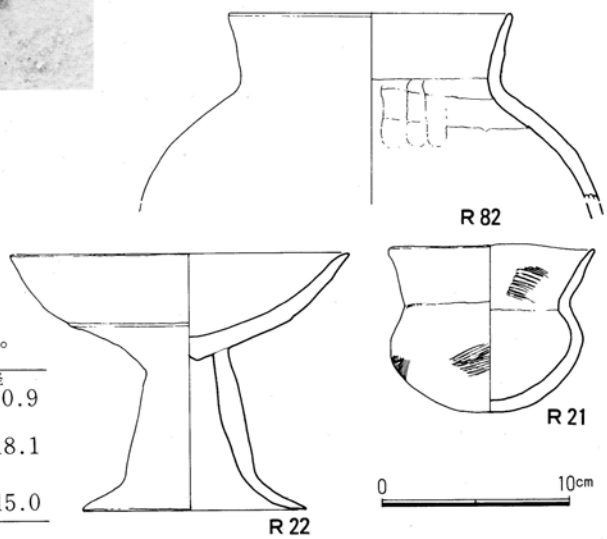


Fig.60　ＳＢ50出土遺物（１：４）

中・近世　土坑１基、井戸２基、溝２条を検出した。他に柱穴とみられる小穴があるが、現場あるいは図面上の検討についても、今のところ建物としての配列は考えられない。

土坑　ＳＫ３　平面形隅丸長方形、断面は低い逆台形状の土坑である。覆土は黄褐色土である。土師器坏あるいは碗の口縁部細片が出土した。

Fig.61　ＳＫ３（東から）

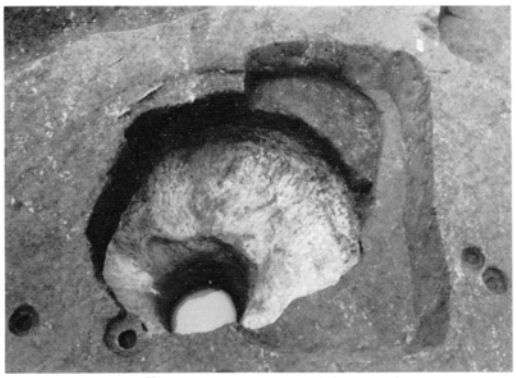


Fig.62　ＳＥ５（南から）

Fig.63　ＳＥ14（南から）

井戸　ＳＥ５・ＳＥ14　ＳＥ５は、楕円形の平面形で長径2.7ｍ、短径2.4ｍ、漏斗状の断面は深さ3.0ｍを測る。覆土は灰褐色土である。ＳＥ14は現状楕円形を呈し、同様3.2ｍ、2.4ｍ、桶と曲物による２段の井戸側の底面までの深さ3.0ｍを測る。

溝　ＳＤ８・ＳＤ９　ＳＤ８は、Ｔ字形に交わる、断面高い台形の溝である。ＳＤ９は断面深皿状の溝である。前者からは18世紀の、後者からは19世紀以降の陶磁器が出土している。

V　E７a区調査の概要

今回の調査は、市下水道局が計画した板付２丁目下水道埋設に伴い、工事区画を事前に調査したものである。

調査区の位置は、板付遺跡中央台地の環溝南端から南東に30～110ｍあまりのところで、台地裾と段落ち部にかかる部分である（Fig. 40参照）。調査は工事区に限られるため、いわば幅１ｍのトレンチ方式で、延長80ｍにわたって行った。調査区が長いため、工区単位に北からⅠ～Ⅲ区とした。

Ⅰ区・Ⅱ区の北半は削平が著るしく、遺構は消滅している。Ⅱ区南半からⅢ区は台地縁から段落ち部にあたる。台地上から弥生中～後期の土壙、段落ち部に上下２面の水田が検出された。

Ⅲ区段落ち部の層序は左図のとおり。５層が上層水田（古代末）、６層は水田開発にあたっての整地層で、12世紀前半を下限とする大量の土器片を包含する。９層が下層水田、10層は粘質のつよい黒色土、基盤は鳥栖ロームである。10層上部、下層水田からは夜臼・板付Ⅰ式土器片のみが出土した。水田を覆う８層（砂層）は板付Ⅱ式を下限とする土器が出土し、したがって下層水田は板付Ⅰ～Ⅱ式期に限定しうる。水田面には若干の足跡のほか、性格不明の凹みが検出された。

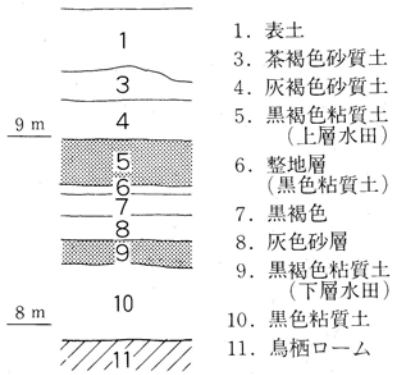


Fig. 64　層位模式図

この上下２面の水田のあり方は、本調査区から北東に100ｍほどはなれたＥ５・６、Ｅ５ｂ区と等しく、同一水田層と想定される。

わずか１ｍ幅のトレンチ調査であったが、台地東縁部での水田を把握しえたことは、板付遺跡復原にとって意味が大きい。

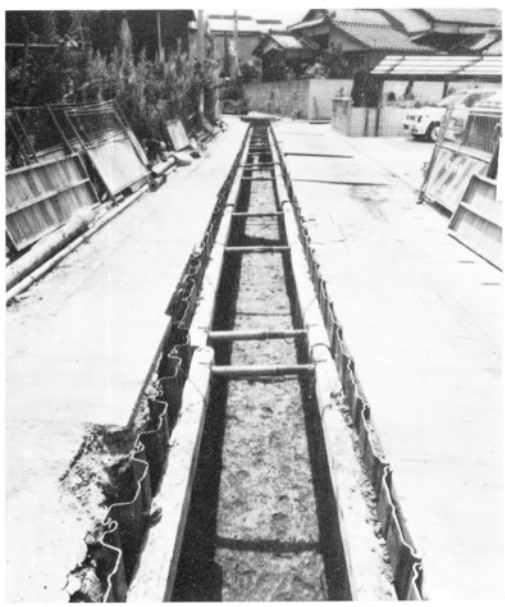


Fig. 65　Ⅲ区全景（北から）

Fig. 66　古代末水田とその整地層（東から）

Ⅵ　Ｆ５ｄ区調査の概要

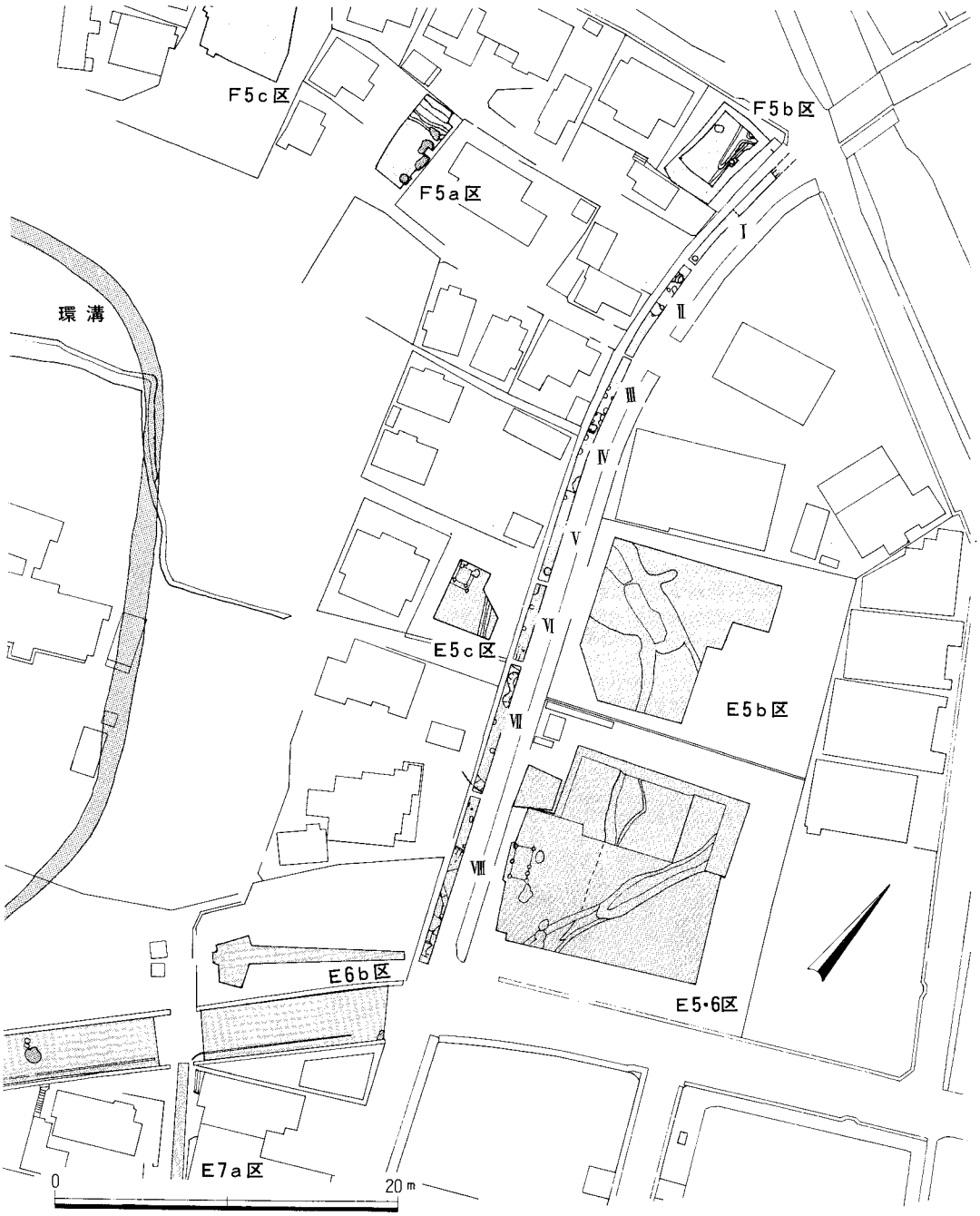


Fig.67　Ｆ５ｄ区周辺図（１：1000）

県道内下水管埋設部の幅１ｍ余り、延長165ｍのうち126ｍについて、土留めの矢板工事後、調査を行なった。工事としては、E6ａ区（第Ⅴ章）のそれと一連のものであるが、工期と位置とが分離しているため、別名称を用いる。調査は北端側から始め、工事Ⅰ期との関係で断続的に３回に分けて行なった。そして、それぞれの工区を人孔部等により更に細分し、結果８区分を行なって調査区割とした（Ⅰ～Ⅷ区）。

Fig. 68　Ⅰ区　水田（中段）南から

調査区を設定した県道は、板付遺跡環濠の立地する中央台地の東縁部と考えられてきたところで、東側ではＥ５・６区、E5ｂ区、西側側ではＦ５ａ区、Ｆ５ｄ区がそれぞれ設定、調査されている。本調査区では、Ｅ５・６区、Ｅ５ｂ区の調査成果から、水田の遺存を予想して調査を行なったが、結果的には水田は、Ⅰ区の北半部に遺存するに留まった。Ⅰ区水田の上位にあり、以南Ⅶ区台地裾部立ち上りまでの間全体に分布するのは12層である。12層下半部は、弥生土器を大量に含んだ有機質混りの粘質土で、人為的な移動、例えば埋立てというような行為が行なわれたことを示している。12層を切り込んで平安時代以降の、12層下に古墳時代の遺構を検出した。遺物はコンテナにして200箱余りが出土した。以下各区の遺構を列記する。

Fig. 69　Ⅳ区12層　遺物出土状況（北から）

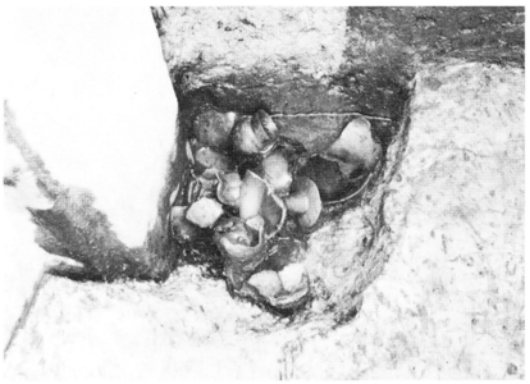


Fig. 70　ＳＫ９（Ⅲ区部分）北から

Ⅰ区（沖積地）水田、土坑１（12層上、瓦の出土）
Ⅱ区（沖積地）　土坑７（12層上）
Ⅲ区（台地）　土坑１（古墳時代）、柱穴　Ⅳ区（台地）　土坑１、柱穴
Ⅴ区（台地～沖積地）　鋳造鉄斧（12層）　Ⅵ区（沖積地）　土坑２
Ⅶ区（沖積地）　溝１、土坑２　Ⅷ区（台地）　土坑２

Ⅶ　高畑遺跡第11次調査の概要

高畑遺跡は、板付遺跡南端から100ｍほどの沖積部をはさんで南にのびる台地上に位置する。これまで10次にわたって台地周囲の調査を実施し、しだいに遺跡の内容を推定しうるようになった。とくに1982年度に実施した第６次調査（Ｂ－12ｂ調査区）によって、台地上に８世紀前半～中葉の創建にかかる寺院址（高畑廃寺）の存在が明らかになった。また各期にわたる出土遺物から、高畑遺跡は夜臼Ⅰ式期以降、弥生時代を継続して存在し、いわば板付遺跡と同様の歩みを辿ったことが知られた。

今回の調査は、台地上をほぼ全面敷地とする九州管区警察学校の下水埋設工事に伴い実施した。調査は幅１ｍのトレンチで、延長 550ｍにわたり、1984年12月10日から１月25日まで延べ32日間を要した。

遺構の概要

台地上は古く造成され、かなりの削平が予想された。たしかに中央部は１ｍ前後の削平を受けているが、削平の影響が少ない縁辺部では遺権保存は良好であった。

検出されたおもな遺構は、夜臼～板付Ⅱ式期の貯蔵穴６、弥生後期の溝２・井戸１、弥生後期～古墳時代中期の竪穴住居址14などである。掘立柱建物の柱穴も少なくないが、幅１ｍのトレンチではまとまりきれない。

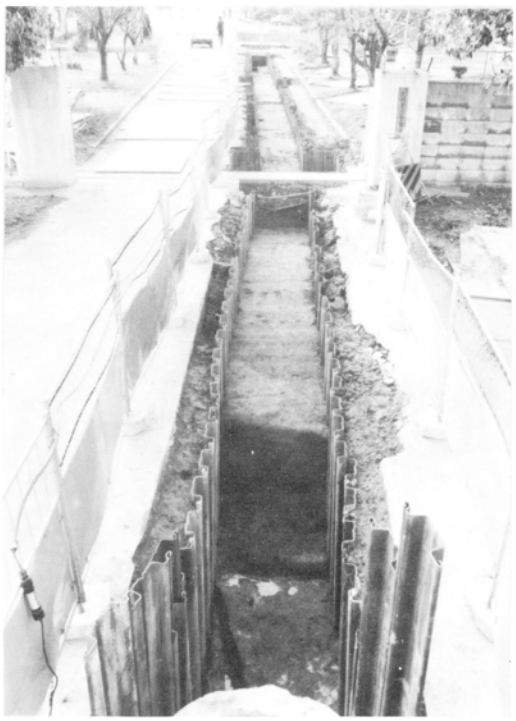


Fig. 71　第７トレンチ全景（東から）

貯蔵穴は３・４トレンチで検出され、台地中央部の高まりに分布した可能性がある。竪穴住居址は第３・４トレンチの東半部、第５トレンチ南半に集中して検出されたが、こうした傾向は地山削平の浅深によって生じた結果であって、本来は台地全体に拡がっていたと思われる。

なお高畑廃寺に関連する遺構として溝（ＳＤ25・ＳＤ 32）と井戸（ＳＥ 20）がある。溝は寺域南限と西限を画すると思われるが、いまのところ確証をもちえない。その溝が寺域を画するものとすれば、東西約130ｍ、南北140ｍの一町強の寺域とみとめうるが、第10次調査（Ｂ11ａ区本書収録）で検出した北東隅は直角でなく、外方に開きぎみである。今回の調査は限られた線の調査で伽藍配置検出を目的としたものではない。今後の課題である。

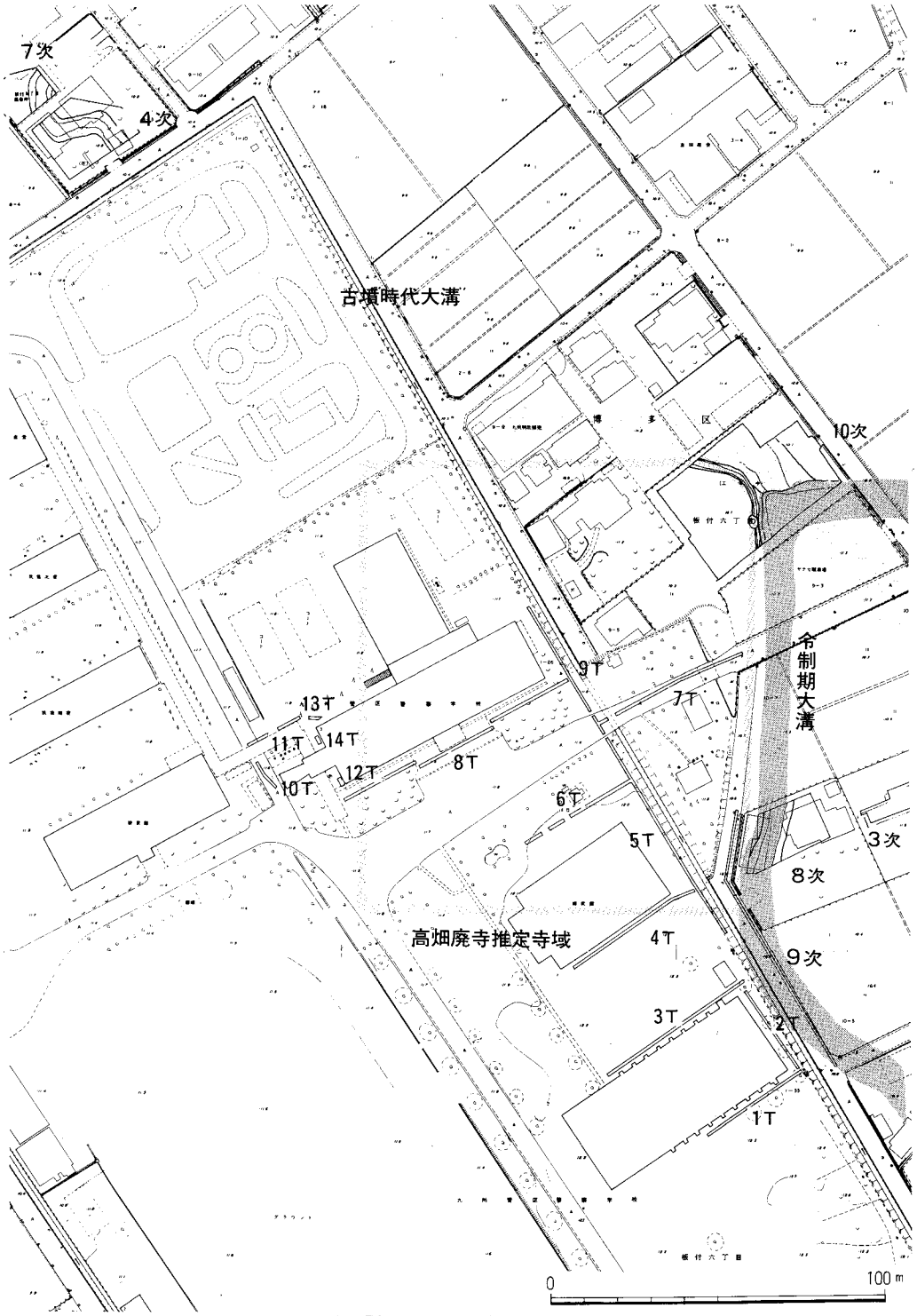


Fig.72　トレンチ位置図

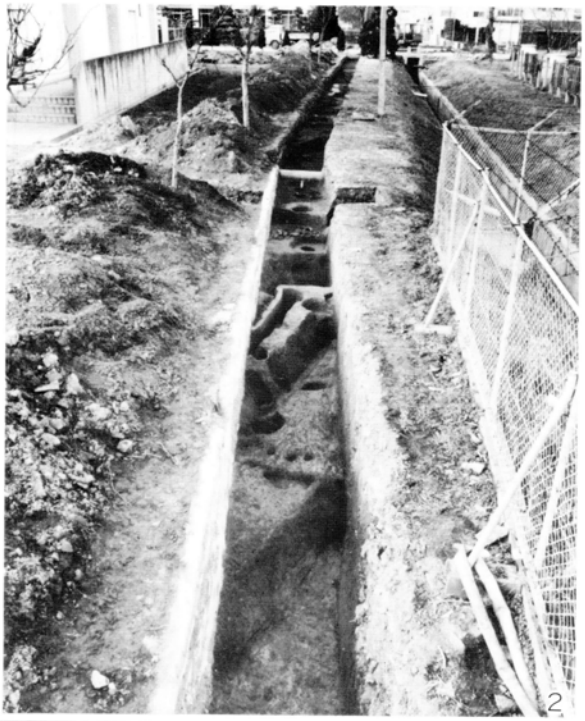


Fig.73　トレンチ並びに遺構

1．第3トレンチ(東から)
2．第5トレンチ(北から)
3．SB019
4．SE021

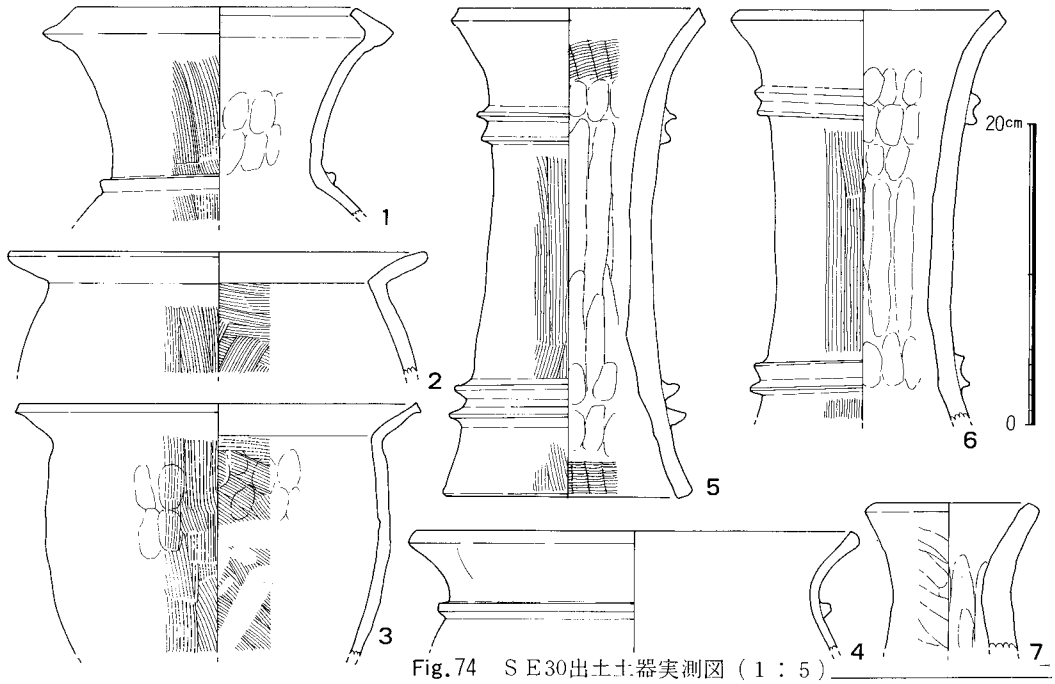


Fig. 74　ＳＥ30出土土器実測図（１：５）

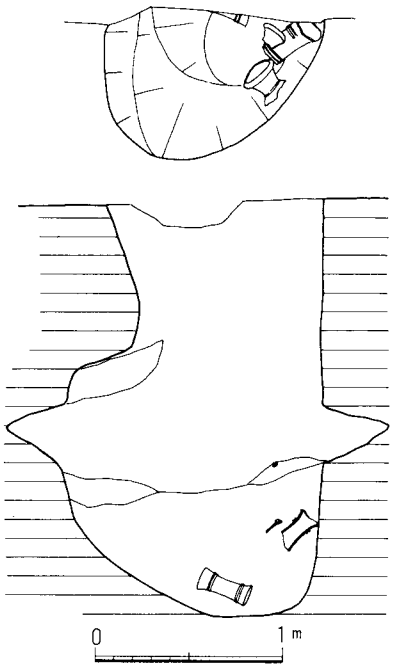


Fig. 75　ＳＥ30実測図（１：40）

SE 30と出土遺物

警察学校本館南の第７トレンチに検出された素掘りの井戸。北半は工事区外のため未掘である。上端は不整円形、径1.2m、深さ2.2mをはかる。ほぼ垂直に掘りこまれ、鳥栖ロームを抜いて八女粘土にいたる。湧水点は鳥栖ローム、八女粘土の境にあり、その部分は円盤状に外方にくえている。埋土下層は粘質のつよい黒色土、上層は黒褐色土で人為的埋土である。下層から井戸祭紀に関連する異形の筒形器台が出土した。

器台Ａ（５・６）５は口径17cm、器高31.5cm、６も同形である。筒部上・下位に２条の凸帯をめぐらす。外面ハケメ調整、上部凸帯の上方はヨコナデ、内面はユビオサエ、ユビケズリ、ヨコハケ調整である。２の外面は舟塗り。器台13（７）は通有の形態である。壺（１）は口縁部がつよく内傾する二重口縁である。甕は頸部に凹帯をめぐらすＡ（４）と、口縁部が単純に外反するＢ（２・３）がある。他に図示していないが粗いタタキを外面に残すものがある。弥生後期中葉。

Ⅷ おわりに

本年度調査の成果をまとめてみよう。

板付遺跡東辺部の状況を知ることができた。

環溝の東辺で一旦湾入する沖積地（Ｆ５ｄ区）は、東南部でも湾入部を形づくる（Ｅ７ａ区）。「田端遺跡」は２つの湾入部の間の突出部に立地することになる。環溝の南方の貯蔵穴は、台地東縁部にまで分布している（Ｆ７ｆ区）。住居址もこの位置まで確認できた。（中期）。

弥生時代の水田を遺跡東縁部の湾入部で確認した。板付遺跡以東の水田は、図中10ｍの等高線が示すように、御笠川の形成した自然堤防と台地との間の後背湿地上に立地している。自然堤防は、図示する水路の配列に明らかになるように条理期の水田区割が残り、それ以前の開田を知る。Ｆ５ｂ区・Ｅ５ｄ区・Ｆ５ｄ区以東にひろがる整地（客土）層は、この水田経営上の条件を改善するために行なわれたかさ上げを示すものなのかも知れない。その時期は、遺物からすると、奈良時代から平安時代の間である可能性がある。

高畑遺跡では、台地部での遺構分布を知ることができた。弥生時代初頭から、古墳時代奈良時代に至る遺構が確認できた。又、台地東縁部を流れる溝は、その北東端部で東方向に屈曲すること、Ｄ10ａ区、同ｂ区で検出された溝が台地東辺部まで続き、同様に多量の遺物を出土することがわかった。

以上概要を記した。詳細は、正式報告に期したい。

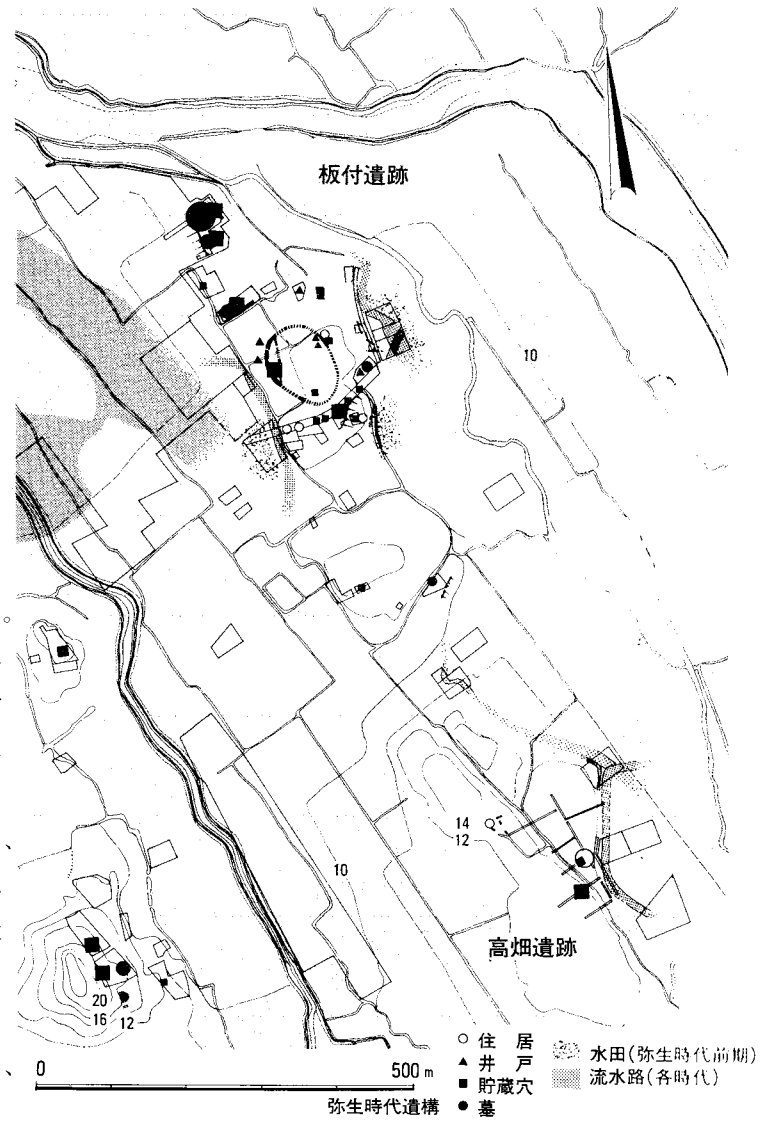
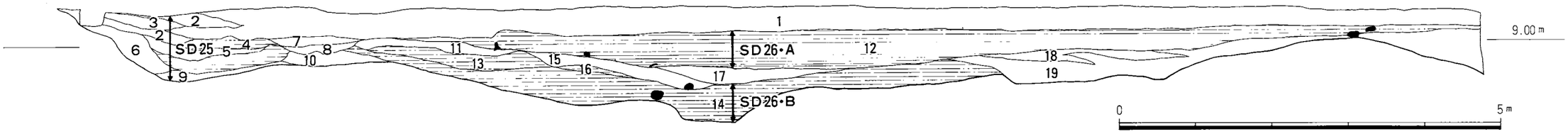


Fig.76　板付周辺遺跡概観（１：10000）

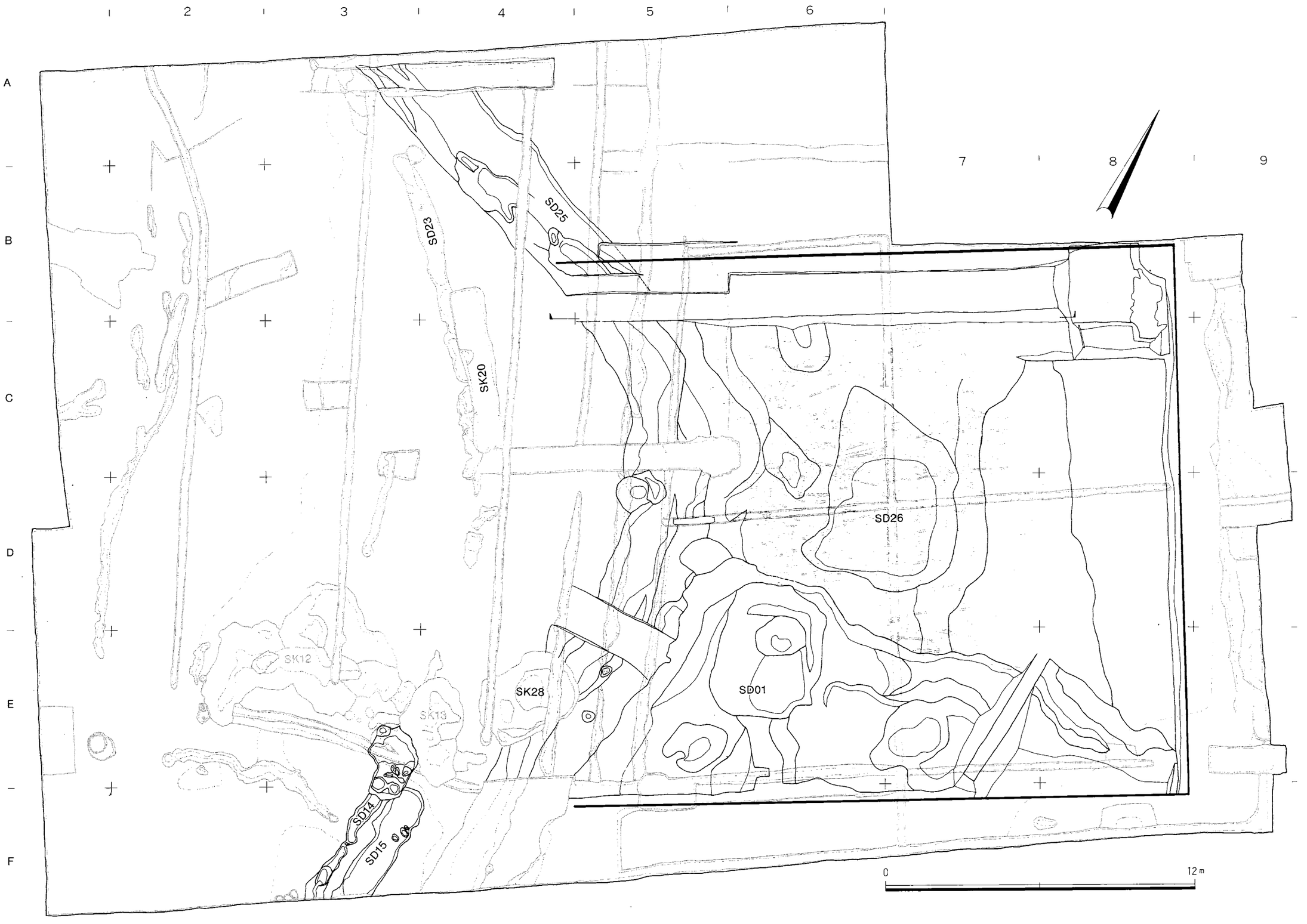


SD25・SD26 土層図
(→N)

Ⅳ層　1．粗砂混り灰褐色粘土

SD25　2．粗砂　3．ロームブロック混り粗砂　4．黒色粘土　5．粗砂ブロック　6．ロームブロック
7．灰褐色粘土（木片を多量に含む）8．砂混り灰褐色粘土

SD26　9．白砂　10．砂ブロック混り暗褐色粘土　11．砂ブロック混り黒褐色粘土　12．黒色粘土（西寄りでは木片を多量に含む）
13．黒褐色粘土　14．黒色粘土　15．黒色シルト　16．黒色粗砂　17．砂混り黒色粘土　18．砂ブロック　19。灰色シルト



付図　板付BIIa区（1：150）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第115集

板付周辺遺跡調査報告書(10)

— 1984年度調査概要 —

発　行　福岡市教育委員会
（福岡市中央区天神1-7-23）

1985年3月31日 発行

印　刷　同盟印刷株式会社